

立正大学

開館10周年記念特別号



建治三年九月身延山七面神示現（高祖御一代略図の内）

目次

山上、泉と、泉文庫—古書資料館開館10周年記念に際して

1. はじめに	1 頁
2. 山上、泉の経歴	1 頁
3. 、泉文庫の収集と展示	7 頁
4. 、泉文庫の現状	1 1 頁
5. おわりに	1 3 頁
注	1 3 頁
、泉文庫目録（暫定版）	1 6 頁
表紙資料紹介	2 6 頁



山上ゝ泉とゝ泉文庫——古書資料館開館10周年記念に際して

立正大学古書資料館専門員 小此木敏明

1. はじめに

2024 年 4 月、立正大学図書館（古書資料館）は「ゝ泉文庫」の寄贈を受けました。「ゝ泉文庫」とは、錦絵などの収集家であり、立正大学の元教授であった山上ゝ泉（やまがみちゆせん）の旧蔵資料を指します。この文庫名は、ゝ泉自身が生前より用いていたものです¹。

資料の寄贈者は、ゝ泉の孫である河合伸雄・村上美子・山上立雄・山上寿子・田中純子、義弟の子である服部典子、曾孫である伊藤眞理子（孫、羽山昭子の子）の諸氏です（敬称略）。寄贈先として立正大学図書館が選ばれた背景には、実践女子大学図書館長の推薦や、立正大学がかつてゝ泉の勤務校であったことなどがあげられます。貴重な資料を託してくださったご親族の皆様に対し、心より感謝申し上げます。

古書資料館は、ゝ泉文庫を受贈した 2024 年に開館 10 周年を迎えました。そこで、本号を「開館 10 周年記念特別号」とし、山上ゝ泉の経歴や資料収集にまつわるエピソードを紹介するとともに、ゝ泉文庫の概要およびその目録を掲載いたします。

2. 山上ゝ泉の経歴

2. 1 誕生から青年期

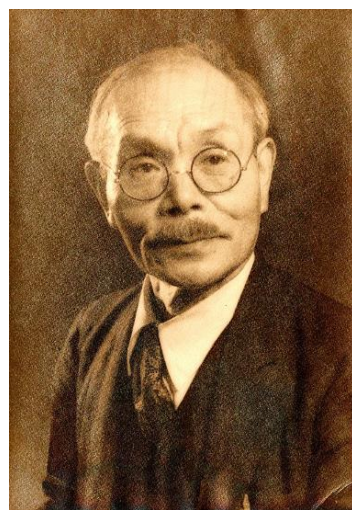
まず、山上ゝ泉の経歴について詳しく紹介します²。ゝ泉の生年は明治 13 年（1880）10 月 6 日、没年は昭和 26 年（1951）3 月 3 日、享年は 70 歳（数え年では 72 歳）でした。ゝ泉というのは雅号で、幼名は覺之助、名は智海と言います。日蓮宗の僧侶として僧正にまで至り、法号は曼珠院日覺でした。

ゝ泉は、佐々木真古人・まつの夫婦の次男として長野県飯田市伝馬町一丁目に生まれましたが、10 歳の時に同県上伊那郡光蓮寺の住職であった山上日持³の養子となり、出家しました。このとき、名を智海と改めたようです。地元飯田市の小・中学校を卒業後、明治 28 年（1894）に明倫学舎という私塾に入塾し、勉強を続けました⁴。

その後、明治 32 年（1899）に上京し、日蓮宗の小石川白山梅檀林に学び⁵、同 34 年（1901）には日蓮宗第一学区中檀林に入りました。この時から、ゝ泉の号を用いるようになります。当時、第一学区中檀林は池上本門寺に置かれていました。本通信 6 号でも紹介しましたが、ゝ泉が入林した年の 3 月 9 日、中檀林は本門寺の火災によって焼失してしまいます。しかし、同年 4 月 1 日には開林式が行われました。ゝ泉も、この開林式に出席していた可能性があります。

ゝ泉は、日蓮宗の大檀林や明治 37 年（1904）に開校した日蓮宗大学林へは進まず、明治 35 年（1902）から同 39 年（1906）まで哲学館（現、東洋大学）で学び⁶、創立者の井上円了（1858～1919）に師事しました。ゝ泉は、円了の追悼号である『東洋哲学』26 卷 8 号（1919 年 8 月）に「追懷の事ども」と題した文章を寄稿しており、その中で、円了のことを「我学師井上先生」と述べています。

図1



昭和 24 年、山上ゝ泉古稀祝賀会写真（ゝ泉親族提供）

* 古稀は数え年に基づく

2. 2 朝鮮での布教活動

その後、日蓮宗の僧としては次のような経歴を歩みました。明治 43 年（1910）に大講師へと進み、明

治 44 年 (1911) 7 月 28 日に神奈川県中郡比々村 (現、伊勢原市串橋) の妙蔵寺住職に任命されました⁷。大正元年 (1912) には朝鮮布教を命じられ⁸、忠清南道大田 (たいでん) 布教所に赴任し、行路病者収容所常務理事を務める傍ら、朝鮮湖南日報の客員や同新聞短歌選者を担ったとされます。現地での活動の様子は、「朝鮮布教監理部通信 (二)」(『日宗新報』1205 号、1912 年 10 月) に次のように記されています。

大田布教所近況 山上智海師、赴任開設日尚ほ浅く、僅々二旬なり。然るに師は独特の快弁を以て新案教談式の講話を試み、〇〇〇〇〇〇を以て檀信を勧化し、大ひに当地に好評を得て、開設直ちに柱時計・導師蒲団・本箱等数点の寄附申込者を出し、日々檀信の増殖を来し、終日多忙の盛況なり。尚ほ師は、毎日曜日に夜講を開催し、毎に数十名の参聴者ありて、現仮布教所にては狭隘を感じつゝありとのことなれば、其有望なる推知すべきなり。最も、当地は朝鮮有数の商業地とて、各宗寺院も相当建物を有し、盛んに布教中なれば、師は独特の技を揮ひ、大ひに彼等を凌がん方便として、『湖南日報』に〇〇〇〇を執筆し、励精権化に努めつゝあり。委細視察後再報せん。⁹

通信記事からは、ゝ泉が積極的に活動していた様子がうかがえますが、布教の方法や、ゝ泉が書いた『湖南日報』の記事内容が伏せ字 (〇の部分) になっています。『湖南日報』は明治 42 年 (1909) 8 月 9 日に創刊された隔日発行の新聞で、編集人は川島勝、発行所は朝鮮忠清南道懷徳郡にあったことが知られています¹⁰。『湖南日報』を調査すれば伏せ字に入る内容が分かるかもしれませんが、現時点では未確認です。

〈聖徳太子孝養像〉

ゝ泉文庫の中には、ゝ泉の大田布教時代に関わりがある資料が一点あります。それは、肉筆の「聖徳太子孝養像」です (図 2 右)。もとは軸装だったと思われますが、現在は本紙と、その周囲の切れ地部分のみ残っています。一説に孝養像は、16 歳の聖徳太子が用明天皇を看病した際の様子を表現したものとされ、手に柄香炉を持つのが特徴です。香炉を持つことが仏教への帰依を示すため、寺院に安置されることが多かったようです¹¹。図の上部には「龍道人」が「丙辰之夏」に記した画賛がありますが¹²、「龍道人」や制作年代については不明です。

この資料の裏面には、以下のような墨書きが見られます (図 2 左)。

大正二年五月

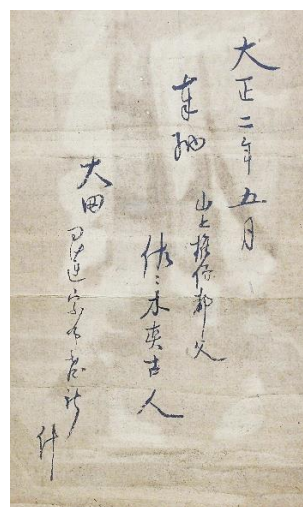
奉物 山上権僧都父

佐々木真古人

大田 日蓮宗布教所付

「山上権僧都」はゝ泉のことであり、この墨書きがなされた時点では、大講師から権僧都に昇進していたと考えられます。「佐々木真古人」はゝ泉の実父の名です。「大正二年五月」当時、ゝ泉はまだ朝鮮に滞在していたため、「大田 日蓮宗布教所」も朝鮮の大田 (たいでん) を指すと推定されます。つまり、大正 2 年 (1913) 5 月に佐々木真古人が贈った掛軸が、朝鮮の大田布教所に置かれていたこととなります。あるいは、ゝ泉が布教活動を行う中で、この孝養像を信徒に見せていた可能性もあるでしょう。

図 2



▲裏面の書入れ

2. 3 教育者（研究者）の道

2. 3. 1 教育者としての経歴

大正 7 年（1918）3 月に東京へ戻ったゝ泉は¹³、翌大正 8 年（1919）の 11 月 19 日に日蓮宗宗務院臨時詰を命じられています¹⁴。臨時詰を辞任した後かどうかは不明ですが、同年には、日蓮宗大学の学監¹⁵だった望月日謙（1865～1943）の推挙により、日蓮宗大学中学部の講師となりました。以降、ゝ泉は教育者（研究者）としての道を歩み始めます。なお、望月日謙は日蓮宗宗務総監（大正 5 年）、立正大学学長（昭和 6 年）、身延山久遠寺 83 世（昭和 6 年）などを歴任した人物として知られています¹⁶。

その後の主な教職歴は以下の通りです。ゝ泉は立正大学だけでなく、他の教育機関でも講師・教授として活躍していたことが確認できます。

大正 11 年（1922）	日蓮宗大学中学部教授（6 月 10 日） ¹⁷
大正 13 年（1924）	立正大学予科教授
大正 14 年（1925）	立正大学専門部教授（4 月 1 日） ¹⁸ 、立正中学教諭
昭和 7 年（1932）	立正学園家政女学校講師
昭和 10 年（1935）	立正大学学部講師 ¹⁹
昭和 15 年（1940）	東洋大学講師
昭和 22 年（1947）	立正大学文学科主任教授
昭和 24 年（1949）	東洋大学兼任教授、東洋大学学位論文審査教授会員を嘱託される

各時期の状況をもう少し詳しく見ていきましょう。立正大学が誕生したのは、大学令による設立認可を受けた大正 13 年 5 月 17 日のことです。この時、立正大学には学部（文学部）・予科・研究科が設置されました。ゝ泉は、立正大学創立時に予科の教授となったと考えられます。予科は、学部入学の前段階となる旧制高等学校に準じる課程です。

翌大正 14 年 4 月には、立正大学に専門部（夜間）が置かれ、日蓮宗大学中学部が立正中学と改称されました²⁰。これに伴い、ゝ泉は専門部教授と立正中学教諭も兼ねることになります。専門部は、旧制大学に付設された専門学校に当たります。

昭和に入ると、ゝ泉は立正学園高等女学校（現、文教大学）の一つであった立正学園家政女学校²¹や、立正大学の学部、母校である東洋大学でも講師を務めるようになりました。

戦後、私立大学は新たな学制によって新制大学へと移行していきました。東洋大学が新制大学の認可を受けたのは昭和 24 年 2 月 21 日です。同年より、ゝ泉は東洋大学の教授を兼任することになりました。新制大学になった後も、しばらく旧制学部が併存していましたが、ゝ泉は旧制学部で「国文学」を教えていたようです²²。

2. 3. 2 学部教授への就任時期

戦前に立正大学の予科・専門部の教授となっていたゝ泉ですが、学部教授に就任したのはいつ頃でしょうか。現在、「大学教授」という肩書からイメージされるのは、学部教授のことだと思われます。そのため、細かい点ではありますが、この点も検討しておきましょう。

ゝ泉が学部教授になった年については、資料によって食い違いが見られます。ゝ泉が昭和 25 年（1950）に刊行した歌集『曼珠』（かぐのみ社）に載る「著者略歴 及 主要著書」の中では、昭和 8 年（1933）に「立正大学学部教授」になったと明記されています。しかし、「山上ゝ泉先生略歴」（注 2 参照）では、昭和 10 年に学部講師になったとあるものの、学部教授就任の記載がありません。昭和 8 年に学部教授だったゝ泉が昭和 10 年に学部講師に降格するとは考えにくいため、いずれかの記事に誤りがあることとなります。

先に結論を述べると、昭和 8 年の学部教授就任はゝ泉の記憶違いである可能性が高そうです。他の資料

によれば、昭和 8 年当時のゝ泉は学部教授でなく、学部講師として講義を行っていました²³。また、当時の学生要覧にあたる『立正大学一覧』も確認しましたが、昭和 17 年（1942）当時も、ゝ泉は学部講師として記載されています²⁴。

昭和 22 年（1947）、ゝ泉は「文学科主任教授」となっています。ただし、この「文学科」が学部と専門部のどちらに属するものか明確ではありません。当時、学部には文学科が、専門部には国文科が置かれていました²⁵。「文学科主任教授」という表記が正しければ、この時点で学部教授に就任していた可能性も考えられます。とはいえ、学部講師からいきなり主任教授になるのはやや不自然です。『立正大学一覧』は学内にもすべて揃っていないので確実なことは言えませんが、もしかすると、昭和 8 年は昭和 18 年の記憶違いである可能性も否定できません。この点については、今後さらに調査を進めていく予定です。

〈講義ノート『総合高等日本文法（要綱）』〉

ゝ泉は、日蓮宗や法華經に関わる仏教文学を広く研究しており、学部講師として「国文学研究」の授業を担当していました。一方、予科や専門部で教えていたのは国語や国文法（修辞学）でした。これは、ゝ泉が日蓮遺文の文章や語法を研究対象としており、文法や表現への関心が高かったためと考えられます。昭和 10 年（1935）には、高等学校や専門学校向けの教科書・参考書として『総合高等日本文法』と『修辞学新講』の 2 冊を白帝社より出版しました。

今回寄贈を受けたゝ泉文庫の中には、この『総合高等日本文法』の講義用ノートも含まれていました。ノートの表紙には「総合／高等日本文法／（要綱）」と記されています（図 3）。

このノートには、ゝ泉が手書きした文章だけでなく、国語に関連する新聞記事の切り抜きなども添付されています。たとえば、昭和 22 年（1947）のローマ字教育に関する記事（図 4①）や、昭和 23 年（1948）の国語審議会による漢字字体の整理に関する記事などが含まれています。ゝ泉は教師として、これらの内容に関心を持っていたことがうかがえます。

図 3

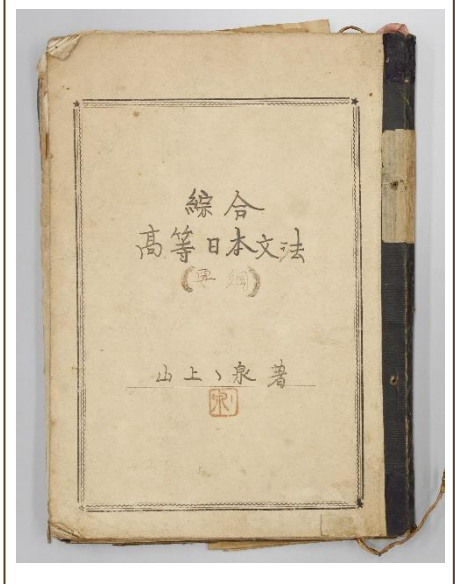
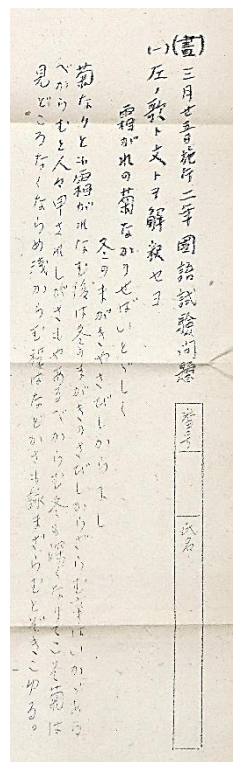


図 4



▲ ①『朝日新聞』昭和 22 年 1 月 21 日切り抜き

▶ ②「(昼) 三月廿五日施行二年国語試験問題」(一部)



その他、興味深い点として、ノートの間に当時の試験問題（ガリ版刷り）が 2 枚挟まれていることがあげられます。一つには「昭和廿三年三月三日（國文法作文） 担任山上先生／豫科第一学年」、もう一つには「（昼）三月廿五日施行二年国語試験問題」（図 4②）と記載されています。前者は昭和 23 年の予科 1 年生の試験問題です。後者に年号の記載はありませんが、問題の内容から学部か専門部 2 年生の試験問題と考えられます。戦前の講義内容が垣間見える面白い資料と言えるでしょう。

2. 4 歌人としてのゝ泉

2. 4. 1 短歌雑誌『かぐのみ』

ゝ泉は、実父である佐々木真古人を歌道の師としており²⁶、短歌や詩を得意としていました。授業の教材として『和歌の構造とその表現作法』（未見）や『短歌作法新講』（立正同窓会、1940 年）を執筆し、『久遠の春』『虚空』『曼珠』といった歌集を刊行したほか、校歌の作詞も数多く手がけました²⁷。

また、ゝ泉は短歌会の結社にもたびたび関わっています。哲学館時代の明治 38 年（1905）1 月 8 日には、歌人の尾上柴舟のもとに集い、「金箭会」を結成しました²⁸。その後、大正 14 年（1925）2 月には、立正大学内に「立正短歌会」を設立し、機関紙『立正短歌』を出しています。さらに、昭和 4 年（1929）2 月には、晩年に至るまで活動を続けた短歌結社「かぐのみ社」を創立しました。

かぐのみ社は、短歌雑誌『かぐのみ』を定期的に刊行していましたが、その前身は、学内向けに発行された『立正短歌』でした。『立正短歌』から『かぐのみ』への誌名変更は、対外的な活動の展開を意図したもので、謄写版から活字印刷への切り替えを契機として行われたとされています²⁹。実際、かぐのみ社となって以後は対外的な発信力を高め、『かぐのみ』に加えて記念会誌や同人の歌集、ゝ泉の著作なども、かぐのみ社から刊行されるようになりました。

「かぐのみ」という名称は、常世の国にあるという「ときじくのかくの木実（登岐士玖能迦玖能木実）」³⁰に由来します。これは、「時を定めず常に輝く木の実」を意味し、「橘」を指すとされます。江戸時代、井桁に橘をあしらった紋（図 5）は日蓮宗の宗紋として知られていたことから、『立正短歌』との繋がりを示す命名でもありました³¹。

図 5



▲ 井桁に橘紋
「道戯手遊合戦」（ゝ泉文庫の錦絵）より

短歌雑誌『かぐのみ』は、ゝ泉が没した昭和 26 年（1951）に中断しましたが、半年後の 9 月には、ゝ泉の三男である山上三千生によって復刊されました³²。復刊『かぐのみ』の一部は、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できますが³³、復刊前のはデジタル化されておらず、立正大学図書館にも全巻揃ってはいません。昭和 20 年（1945）頃の『かぐのみ』には、ゝ泉が自身の人生を振り返った「私の歩める道」が連載されていましたが、図書館には欠号が多く、すべてを確認できていない状況です³⁴。今回の寄贈で欠号の一部は補われましたが、今後は、ゝ泉文庫の資料として『かぐのみ』を全巻揃えることも必要でしょう。

2. 4. 2 追悼歌と交友関係

ゝ泉の青年期には、読者の論文や散文、詩歌などを掲載する投稿雑誌が多く発行されていました。ゝ泉は、それらの雑誌に詩歌などの投稿作品が掲載される常連だったようです³⁵。明治 41 年（1908）頃には、投稿雑誌の一つである『中学文壇』の主筆となり³⁶、送る側から審査する側に回っています。

ゝ泉は、大学教授や僧侶としての交流に加え、投稿雑誌を介した青年期からの活動により、多くの文化人と交友関係を築いていたと考えられます。その一端は、古稀祝賀会や他界時に、多くの著名人がゝ泉に歌を贈っていたことからもうかがえます³⁷。ここでは、『かぐのみ』23 巻 1 号（1952 年 3 月）の「山上ゝ泉先生追悼号」に掲載された追悼詠の一部を紹介します。

山上のゝ泉死にきとつたへ来ることそのことのすでにすべなき
 水穂子の文くりひろげ驚きぬ大人病みますと知らざりしわれは³⁸
 みとらひに馳すべきわれのまたやみて人して読ます弔詞かなしも
 西の旅船を南に向けたらむ彼岸はかぐの花さかりなる

釈迢空
 山川智応
 生田蝶介

新村出は言語学者であった京都帝国大学の教授ですが、多くの歌を残しています。釈迢空（折口信夫）は民俗学者であり歌人としても知られた人物、山川智応は田中智学に師事した日蓮教学者、生田蝶介は歌人・小説家として活躍した人物です。4 首目は名前がないので、3 首目と同様に山川智応が詠んだものでしょう。この他、詩人で小説家の室生犀星とも親交があったようです。犀星は、ゝ泉の葬儀で弔辞を依頼されたものの、時間がなくて参列できなかったそうです³⁹。なお「山上ゝ泉先生追悼号」には、詩人の三木露風による弔辞が掲載されています⁴⁰。

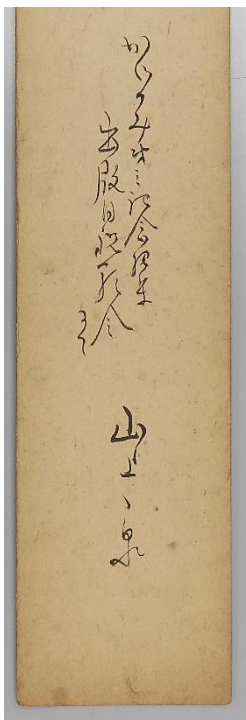
〈ゝ泉の短冊と色紙〉

ゝ泉は、昭和 14 年（1939）に大日本歌人協会の会員となるなど⁴¹、戦前においては歌人としても知られた存在でした。新聞進一の『明治大正短歌史』（東京堂、1948 年）でも、「その他の人々」（第 2 章 大正短歌史後期）の中で一定の評価を受けています。しかし現在、ゝ泉の短歌作品を知る人は多くないでしょう。

今回寄贈を受けたゝ泉文庫の中には、ゝ泉が自作の短歌を自筆した短冊 10 枚（内 2 枚は色紙を短冊状に折ったもの）と色紙 11 枚が含まれています。これらの歌の中には、戦時中に詠まれたものや、故郷である長野の景勝地を詠んだものなどが見られます。

例えば、図 6 の短冊の表には「戦時下風景 上着なきおのもおのものが平等に ま夏の街を行きてつかれず ゝ泉」（濁点補足）とあり、裏には「かぐのみ第三記念歌集 出版日祝歌会にて 山上ゝ泉」と記されています。この裏面の記載から、表の歌は『かぐのみ第三記念歌集』の出版日を祝う歌会で詠まれたことが分かります。この歌集は、ゝ泉をはじめとする同人たちの歌を収録したもので、昭和 18 年（1943）6 月

図6



▲裏面

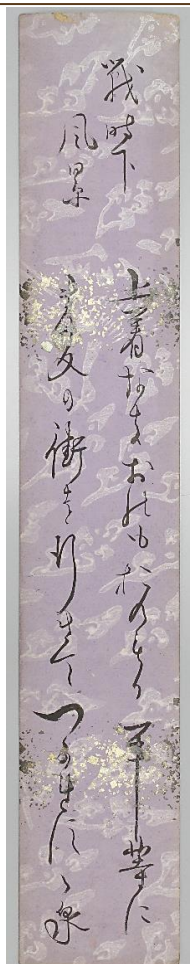
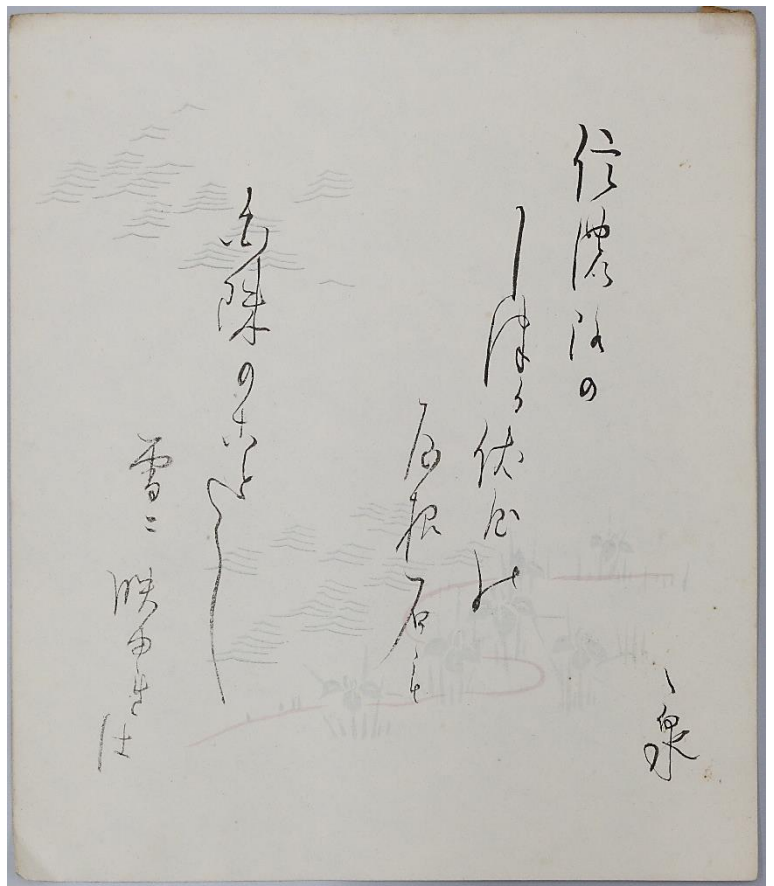


図7



10 日にかぐのみ社より刊行されました。ただし、歌に「ま夏」とあることから、歌会は刊行日から 2 カ月ほど遅れて行われた可能性もあるでしょう。

この短冊が書かれた昭和 18 年当時は、太平洋戦争のまっただ中でした。表の歌は、夏の暑さのために国民服の上着を脱いだ市民たちが、物資の不足する中でも疲れを見せずに街を行き来する様子を詠んでいると考えられます。この歌からは、敗戦の兆しがまったく感じられません。

『かぐのみ第三記念歌集』の序文は、ㄥ 泉が書いていますが、その最後は、「大東亜戦の目的完遂の曙光を目ざして、前線に銃後に歌ひゆくことを念願しようと思ふ」という言葉で締めくくられています。ㄥ 泉も、時局の影響を受けていたことが分かります。

図 7 の色紙には、「信濃路のしづが伏屋の屋根石も 白珠のごとし雪に映ゆれば ㄥ 泉」(濁点補足)と記されています。この歌は、信濃(長野)路の粗末な家の屋根に押さえとして置かれた無数の石が、雪に映えて真珠のように輝いて見える情景を詠んだものです。制作年は不明ですが、ㄥ 泉の歌集『曼珠』(かぐのみ社、1950 年)の 9 頁に掲載されています。

3. ㄥ 泉文庫の収集と展示

3. 1 古書・錦絵の収集

ㄥ 泉には、古書や錦絵の収集家としての一面もありました。「学窓閑話」(『立正大学学園新聞』1938 年 4 月 15 日)という、自身の蔵書収集癖について語った文章も残されています。それによれば、ㄥ 泉は「古書籍渉猟の性癖」が目覚めると、帝国図書館の特別閲覧室や九段下の大橋図書館(現、三康図書館)へ古書を見に出かけました。それでも満足できないときは、神保町や本郷三丁目の古書屋街を何度も巡り、さらに白木屋(しろきや)や高島屋などで開催される古書展にも足を運んだといえます。なお白木屋は、寛文 2 年(1662)に日本橋で開業した小間物屋・呉服屋で、近代には百貨店へと発展した店です。

ㄥ 泉が古書店や古書展で購入していたのは、日蓮宗の文芸資料をはじめ、「庶民文芸中の稀観本」や「小倉百人一首関係の珍籍」でした。その中でも、特に力を入れていたのが錦絵の収集です。今回寄贈を受けたㄥ 泉文庫の資料の大半は錦絵となっています。

ㄥ 泉は、自身の錦絵収集について「宗門の錦絵・版画蒐集縁起」⁴²にまとめています。ㄥ 泉が錦絵の収集を始めたのは大正 8 年(1919)頃のことでした。そのきっかけとなったのは、上野公園の韻松亭で開催された錦絵展覧会で、二代歌川広重の「身延山開帳朝詣新大橋の景」(3 枚続)を見つけ、入手したことでした。この作品は、文久 3 年(1863)に行われた身延山久遠寺の出開帳に向かう講中(信者の集まり)が新大橋を渡る様子を描いたものです。身延山久遠寺は、山梨県南巨摩郡身延町にある日蓮宗の総本山であり、出開帳とは、普段見せない秘仏などを他の土地に運んで公開することを指します。

ㄥ 泉は、この錦絵を入手したときのことを以下のように述懐しています。

それに図顕された講中の男女風俗や万灯の意匠、団扇太鼓の様式等までを詳細に知ることが出来た歓喜は、筆舌の能く尽すところでない。飛びつかんばかりのおもひで之を手に入れたのであつた。

ㄥ 泉は、出開帳に向かう日蓮宗講中の様子を知るための絵画資料として、この錦絵を評価していました。単なる絵画趣味で錦絵を収集し始めたのでないことが分かります。なお、「身延山開帳朝詣新大橋の景」は、残念ながら寄贈資料の中には含まれていませんでした。

ㄥ 泉はその後、日蓮宗に関連するあらゆる錦絵や版画を収集していきました。例えば、日蓮の生涯や逸話を題材とした日蓮聖人御伝版画、日蓮宗の在家信者であった加藤清正を描いたもの、さらには日蓮宗の著名な寺院が関わる作品があげられます。著名な寺院とは、身延山久遠寺・池上本門寺・堀之内妙法寺・中山法華経寺・柳島妙見堂・白金覚林寺(白金の清正公)・能勢妙見山などです。そうして収集された錦絵は、日蓮宗に関わるものだけで 500 枚に達していたといえます⁴³。

3. 2 ヶ 泉文庫の展示

3. 2. 1 展示の具体例

他宗に比べ、日蓮宗関連の錦絵は多く製作されていました。しかし、ゝ泉が錦絵を集めていた大正期頃、日蓮宗宗門内では、錦絵をはじめとする絵画資料を軽視する風潮があったようです（後述）。ゝ泉は、そうした意識を改めようとしたのか、自身が収集した錦絵をたびたび展示のために貸し出していました。例えば、以下のような事例が確認できます。

【大正 15 年（1926）】

（1）6 月 15 日、立正大学創立 25 周年記念祭および図書館開館記念にて二百数十点を展示⁴⁴。

【昭和 9 年（1934）】

（2）5 月 5～6 日、日本宗教学会第 3 回大会（会場、立正大学）にて 170 点余を展示⁴⁵。

（3）歌舞伎座の 5 月興業「蔚山城の清正」にちなむ展覧会で、30 点（67 枚）を展示⁴⁶。

（4）6 月 17～27 日、加藤清正の 325 年遠忌にちなむ展覧会（会場 日本橋白木屋）に 116 点（250 枚）を展示⁴⁷。

【昭和 11 年（1936）】

（5）3 月 5 日～4 月 5 日、日蓮聖人讃仰展覧会（会場、横浜市桜木町駅前の市営興産館）にて約 300 点を展示⁴⁸。

（6）明治座の 3 月興行「熊本城の清正」にちなむ展覧会で、数百種を展示⁴⁹。

以下、（1）（3）（4）（6）の例について、もう少し詳しく見ていきましょう。

3. 2. 2 立正大学図書館開館記念の展示と影響

ゝ泉は、「立正大学図書館と錦絵」（『立正大学新聞』1933 年 10 月 6 日）という文章の中で、（1）の展示について以下のような感想を述べています。

この催しで■（破れ）しきつてゐた宗旨の人々も多少は「美化された日蓮宗」といふ芸術方面へ小首を傾けるやうにもなつた。私の企ては正にそのヒントを与へたのだ。「日蓮主義」の口絵の件も吾等の錦絵趣味から来てゐる。聖伝刊行会の「日蓮聖人御伝版画」も、実際吾等の意見を参酌してゐるのである。

——さて、今日でこそ宗門の錦絵の類は、私一人の所蔵だけでも正に五百枚に達してゐようが、立正の開館当時で、あれだけ豊富な材料を蒐集したのは決して並み大抵の業ではない。その癖、どうです！一部の先輩とか申す人々は、私どもを外道視してゐたものである。学者のするわざではないぐらゐに考へて鼻先でフフンとあしらつて御座つたものである。

あくまでゝ泉の主観ではありますが、「外道視」や「学者のするわざではない」という言葉から、錦絵の収集に対する宗門内の目が厳しかったことがうかがえます。その分、宗門の意識の変化に対しては自身の功績であるという自負もあったようです。自身の影響を受けた企画として、「日蓮主義」の口絵や「聖伝刊行会の「日蓮聖人御伝版画」」の刊行をあげています。

「日蓮主義」とは、日蓮宗宗務院が布教用に刊行していた雑誌で、昭和 2 年（1927）10 月から昭和 18 年（1943）年 11 月・12 月合併号までの刊行が確認されています⁵⁰。その口絵には、日蓮宗に関係した絵画などが載せられていましたが、昭和 4～5 年（1929～1930）ごろには錦絵が多く取り上げられました。中でも、3 巻 7 号（1929 年 7 月）・3 巻 10 号（1929 年 10 月）・3 巻 12 号（1929 年 12 月）・4 巻 11 号（1930 年 11 月）には、ゝ泉文庫の錦絵が掲載されています。『日蓮主義』の口絵には、確かにゝ泉の影響が見られます。

一方、「日蓮聖人御伝版画」は、昭和 3 年（1928）に刊行が開始された『日蓮聖人御伝木版画』を指すと考えられます。これは、日蓮の生涯から 33 の場面を選んで版画としたもので、版画・題賛・解説の 3 枚セットで構成されていました⁵¹。しかし、この企画が、泉の試みを意識していたかどうかは不明です。

3. 2. 3 加藤清正関連の展示

（3）（4）（6）の展示は、加藤清正に関する内容でした。前述の通り、清正が日蓮宗を信仰していたことは広く知られており、錦絵に描かれる清正像の多くは「南無妙法蓮華経」と書かれた題目旗（図 8）を指していました。江戸時代、清正は「清正公」（せいしょうこう）と呼ばれ、信仰の対象になるとともに、豊臣秀吉の朝鮮侵略時のエピソードや虎退治などが知られ、人気の高い武将でした。

（3）の「蔚山城の清正」と（6）の「熊本城の清正」は、どちらも吉田絃二郎（1886～1956）の作品で、「二条城の清正」を加えた三部作として知られていました⁵²。蔚山（うるさん）城は、朝鮮・明軍に対して清正らが籠城した城のことです。ちなみに、観劇を趣味としていた、泉が最後に観た演目は、「二条城の清正」でした⁵³。

（4）が関係する加藤清正の 325 年遠忌は、清正が統治した肥後（熊本）にて、昭和 10 年（1935）に営まれました。泉の錦絵が展示されたのは、その前年に東京で開催された関連イベントでのことです。当時の新聞には「清正公三百廿五年忌／熊本本妙寺 清正公出開帳」と銘打たれた広告が掲載されていました⁵⁴。「本妙寺」は、清正が建立した熊本の日蓮宗寺院です。

詳細は省きますが、このイベントは規模が大きく、白木屋での展示だけでなく、著名人の講演や子供たちの武者行列なども行われました。当時の様子は、日蓮宗宗務院発行の『月刊宗報』212 号（1934 年 8 月）の 8 頁に詳しく書かれています。また、『清正公展覧会記念 昭和九年六月』（白木屋、1931 年）という記念誌も作られていました⁵⁵。この記念誌は、当時の写真が貼り込まれたもので、展示に協力した団体や個人の名前なども記されています。当然ながら、泉の名前も載っています。

図 8



▲ 題目旗（玄題旗）
 泉文庫「御利生結ぶの縁日」より

〈歌舞伎座に展示した「三韓征伐之図」〉

（3）と（4）の展示については、錦絵の借用に関する、泉宛の書簡類が残っています⁵⁶。中でも、（3）の展示に際して歌舞伎座が提出した「御預証」には、借用した錦絵のリスト（30 点 67 枚）が載せられていました。今回寄贈された、泉文庫の中には、加藤清正に関連する錦絵が多く含まれていますが、そのうち「御預証」に記載があるものは、以下の 7 点のみです。

九		清正公大神儀	壺枚	廿	竹斎	清正猛虎討取	参枚
十三	芳員	大形清正公	壺枚	廿一	国周	三韓征伐	参枚
十八	芳員	清正公出陣	参枚	廿二	芳虎	三韓征伐	参枚
				廿六	国輝	正清十六勇臣	参枚

ここで紹介したいのは、この中の「廿二 芳虎 三韓征伐 参枚」です。これは、文久 3 年（1863）8 月に伊勢兼より刊行された歌川芳虎作の「三韓征伐之図」（図 9）を指すと考えられます。「御預証」には「参枚」（3 枚）と記されていますが、本来は 3 枚続 2 組からなる大作です。図 9 の上段左と下段右の鉄砲の斉射部分が連続していることから、6 枚続とも見なせます。「御預証」の記載が 3 枚となっているのは、上段の 3 枚のみを貸し出したためだと推測されます。

「三韓征伐之図」は、豊臣秀吉の朝鮮侵略を題材とした錦絵です。加藤清正の名は画中に見られませんが、上段右の馬上の人物に注目すると、長烏帽子形の兜をかぶり、蛇の目紋の陣羽織をまとっていることが分かります。さらに、一部が隠れてはいるものの、背後には「南無妙法蓮華經」と書かれた題目旗がたなびいています。これらはすべて、清正を表現する際に見られる特徴的な描写です⁵⁷。

また、馬上の清正の右側には「旗曼荼羅」が描かれています。旗曼荼羅とは、日蓮が蒙古襲来に際して書いたとされるもので、旗の功德によって蒙古軍を撃退したという伝承が、江戸後期には広く流布していました。ここに描かれているのは1枚のみですが、本来は「日の丸」と「月の丸」の2枚一対で、日の丸は押上最教寺、月の丸は身延山久遠寺が所持していたとされます⁵⁸。

この錦絵が刊行された文久3年は、久遠寺の出開帳が江戸で行われた年でもありました。この錦絵に「旗曼荼羅」が描かれている背景には、清正が日蓮宗の信者であったこと、「蒙古」と同じく合戦相手の「朝鮮」が異国であったこと、それに加えて、月の丸を所蔵する久遠寺の出開帳が刊行と同年に催されたことが関係していると考えられます。

図9

旗曼荼羅 ←



3. 3 「日蓮宗関係錦絵・版画総目録」とゝ泉文庫

ゝ泉の錦絵収集に対する日蓮宗宗門内の反応は、当初冷ややかなものだったようですが、その認識は次第に変わっていきました。意識の変化が明確に分かる出来事として、当時の日蓮宗宗務院管長であった望月日謙が、ゝ泉に対して日蓮宗関係の錦絵や版画を調査し、布教用として 1 冊にまとめるように辞令を発したことがあげられます。この辞令は昭和 15 年 (1940) 12 月 15 日に出され、調査期限は 3 年間とされました⁵⁹。

これにより完成したのが、『日蓮聖人註画讃之研究 (附日蓮宗関係錦絵版画総目録)』(日蓮宗宗務院、1943 年 11 月)です。同書の前半は、『日蓮聖人註画讃』を始めとした日蓮の伝記類(主に版本)を対象とした研究ですが、後半には、「附篇」として「日蓮宗関係錦絵・版画総目録」が収録されました。

この目録に対しては、次のような注記が見られます。

備考 以下蒐録する錦絵・版画は、その数種数点を除き、悉く珠廬舎ゝ泉文庫架蔵のもののみ。漏れたるは他日之を補ふこととする。(176 頁)

目録に掲載されている資料のほとんどがゝ泉文庫の資料であるならば、「日蓮宗関係錦絵・版画総目録」自体がゝ泉文庫の目録であることもできます。目録の掲載点数は、第 1 部「板木挿絵」が 59 点、第 2 部「錦絵・版画」(「特別版画」を除く)が 437 点、合計 496 点にのぼります。なお、1 点が複数冊(枚)にわたる資料も多いため、かつてのゝ泉文庫は、錦絵の総枚数だけでも 500 枚を大幅に超えていたことになります。

ゝ泉は同書の中で、目録に掲載された資料を宗門へ提供し、宗門はそれを立正大学へ移管して学生や信徒が見られるようにすると述べています⁶⁰。しかし、今回の寄贈を受ける以前には、立正大学内にゝ泉文庫の錦絵は 1 枚も所蔵されていませんでした。この計画は、戦時中の混乱によって実現しなかったと推測されます。

あるいは、昭和 20 年 (1945) 5 月 23 日、ゝ泉の家が戦禍に遭ったことが影響しているかもしれません。「山上ゝ泉先生略歴」(注 2 参照)には、この時の火災によって「一万有余の蔵書珍籍」が焼失したと記されています。しかし今回、ゝ泉文庫の資料が数多く寄贈されたため、文庫が全焼するほどの被害は出ていなかったと考えることができます⁶¹。

4. ゝ泉文庫の現状

4. 1 寄贈されたゝ泉文庫の概要

今回寄贈されたゝ泉文庫の資料の内訳は、おおむね以下のようになります。

錦絵・刷物など総数 175 点 (283 枚) ※「その他」は除く
江戸期 計 69 点 (106 枚)
錦絵 50 点 (87 枚) / 他の刷物 17 点 (17 枚) / 肉筆画 2 点 (2 枚)
明治期 計 90 点 (146 枚)
錦絵 83 点 (139 枚) * 団扇絵 1 点含む / 他の刷物 7 点 (7 枚) * 銅版 1 点・石印版 1 点含む
大正期 計 2 点 (17 枚)
歌舞伎の辻番付 1 点 (1 枚) / 納札 1 点 (16 枚)
昭和期 計 14 点 (14 枚)
版画 14 点 (14 枚) * 銅版画 1 点含む
その他
自筆資料 短冊 10 点 (10 枚) 色紙 11 点 (11 枚) ノート 1 点 (1 冊)

湖月抄（写本） 12 帖（箱入り） *購入時の札に「仙台伊達藩」とあり

明治期以降の折本・冊子 25 冊

寄贈資料のほとんどは、錦絵とそれ以外の刷物類です。寄贈資料の中には、コロタイプ印刷などの錦絵の複製版や、雑誌の附録や折り込み絵を切り離したものなどもありますが、今回は「総数」に含めませんでした。

ゝ泉は、版本も多く所持していたはずですが、寄贈資料の中には一点も見られませんでした。それらは焼失したのではなく、市場に出回ったと考えられます。実際、立正大学図書館で購入したゝ泉文庫の版本も数点あります。今後も見つけ次第購入していく方針です。

前節で述べたように、ゝ泉文庫の目録とも見なせる「日蓮宗関係錦絵・版画総目録」に載る「錦絵・版画」の総点数は 437 点でした。この内、寄贈資料中に現存するものは 74 点（144 枚）で、およそ六分の一程度に留まります。その内訳は以下の通りです（「特別版畫の分」を除く）。

江戸期 錦絵 33 点（59 枚）／刷物（絵入り） 10 点（10 枚）

明治期 錦絵 24 点（53 枚）／刷物（絵入り） 3 点（3 枚）

大正期 納札 1 点（16 枚）

昭和期 版画 3 点（3 枚）

目録に収録されていない錦絵などは 104 点ですが、この内、目録から漏れた日蓮宗関係の資料は 19 点（22 枚）に過ぎません。ゝ泉は、日蓮宗に関わりのない錦絵もそれなりに収集していたと考えることができます。

4. 2 ゝ泉文庫の蔵書印

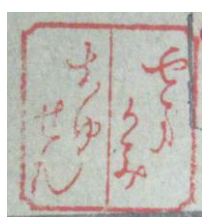
ゝ泉文庫の資料には、ほぼすべてにゝ泉の蔵書印が押されています。ゝ泉文庫の資料であったかどうかは、ゝ泉の書入れや蔵書印の有無によって識別できます。今回寄贈されたものも含めて、現在、古書資料館で確認できる主なゝ泉の印は、以下の A～G となります（名前と住所が記された印は省略）。



A 「ゝ泉」（変形円形）
1.3×1.3cm



B 「ゝ泉」（円形）
2.0×2.0cm



C 「やまかみ／ちゆせん」
（方形）1.8×1.7cm



D 「ゝ／泉」（方形）
2.1×2.1cm



E 「ゝ／泉」（楕円）
2.1×2.3cm



F 「ゝ／泉」（方形）
1.1×1.2cm



G 「ゝ泉／主人」
「山上／ゝ泉」
（方形）
各 1.2×1.2cm

今回寄贈された錦絵類にも印が押されていますが、そのほとんどは A の印であり、B・C の印が確認できる資料はわずかです。D・E・F の印は自筆資料に見られます。G の印は、図書館で購入した版本に押されているものです。錦絵と版本で印を使い分けていたのか、入手時期によって使用する印が異なるのか、今後調査していく必要があるでしょう。

5. おわりに

ゝ泉は、『日蓮聖人註画讃之研究（附日蓮宗関係錦絵版画総目録）』（日蓮宗宗務院、1943 年 11 月）の「凡例」において、次のように述べていました。

著者は、本書の発行を一契機として、かねての念願の通り、架什襲蔵の宗門錦絵・版画の一切を挙げて之を吾が宗団へ提供し、立正大学格護の下に永劫に伝へんとする所以であります。（「凡例」2 頁）

ゝ泉が上記のように記してから 80 年以上が過ぎた今日、ゝ泉の願いにかなり近い形で、ゝ泉文庫の一部が立正大学図書館（古書資料館）に収蔵されるに至ったのは、たいへん喜ばしいことです。図書館に関わるものとして、ゝ泉の志に背くことなく、これらの資料を後世へ伝えていければと思います。また、今回の寄贈が、研究者であり、錦絵収集家でもあったゝ泉の再評価につながることを期待します。

最後に、資料の寄贈や画像の提供にご協力いただいたゝ泉ご親族の方々に、改めて御礼申し上げます。特に、伊藤眞理子氏には、寄贈資料の取りまとめや、他のご親族に対する資料の有無の確認など、格別のご協力を賜りました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

注

- 1 山上智海『日蓮聖人註画讃之研究（附日蓮宗関係錦絵版画総目録）』（日蓮宗宗務院、1943 年）、177 頁。
- 2 ゝ泉の経歴については、「山上ゝ泉先生略歴」（『かぐのみ』23 巻 1 号「山上ゝ泉先生追悼号」、1952 年 3 月）に基づく。ただし、誤りを修正したり根拠を確認したりした場合は出典を記載した。「山上ゝ泉先生略歴」は、ゝ泉の本葬の当日に読まれた嘆徳文（加茂昭風による）を筆録したもの。
- 3 院号は妙昭院。光蓮寺 28 世。大正 4 年（1915）2 月 14 日没。池上本門寺編『日蓮宗寺院大鑑』（池上本門寺、1981 年）、543 頁参照。
- 4 山上ゝ泉「私の歩める道（その二）」（『かぐのみ』20 巻 6 輯、1948 年 12 月）。明倫学舎は、飯田藩主だった堀親広の養子である堀親序（1857～1909）が開いた私塾。林登美人「下伊那の寺子屋Ⅸ 飯田・下伊那の家塾と私塾（2）」（『伊那』796、1994 年 9 月）、22 頁参照。
- 5 当時、小石川白山前町にあった日蓮宗寺院の十行山大乗寺内に置かれた檀林か。山門には「鶏声洞梅檀林」の牌が掲げられていた（『風俗画法』348、1906 年 9 月 10 日、46 頁）。
- 6 東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター編『東洋大学百年史 通史篇Ⅰ』（東洋大学、1993 年）に「明治三十九年専門部第二科卒業」（864 頁）とある。
- 7 『日宗新報』1152 号（1911 年 9 月）の「住職進退」に「神奈川県妙藏寺住職 全廿八日／大講師 山上智海」とあり。
- 8 『日宗新報』1178 号（1911 年 6 月）の「職員任免」に「朝鮮布教ヲ命ス 山上智海」とあり。
- 9 句読点は原文になく、筆者が補った。
- 10 日本電報通信社編『新聞総覧 大正四年』（日本電報通信社、1915 年）、679 頁による。
- 11 聖徳太子奉讃会編『聖徳太子全集』第 5 巻（竜吟社、1943）、「二、孝養太子像」（11 頁）を参照。
- 12 画賛には「龍道人題／丙辰之夏／予現国王身／王身可得度／斑宮憲法新／衡岳法華者」とある。
- 13 山上ゝ泉『歌集 久遠の春』（山上智海、1921 年）の「凡例」に、「朝鮮哀歌」は大正五年前後、則ち朝鮮布教師たりし時代の作、「本土に還りて」は大正七年三月帰東以降の作」とあるのによる。
- 14 『月刊宗報』37 号（1919 年 12 月）の「職員任免」による。この時のゝ泉の僧階は僧都。なお、「山上ゝ泉先生略歴」（注 2 参照）では、臨時詰任命を大正 7 年のこととするが、おそらく誤り。
- 15 『立正大学一覧（昭和 7 年 3 月 1 日現在）』（立正大学、1932 年）の「立正大学略沿革」（4 頁）による。

- 1 6 日蓮門下仏家人名辞典編集委員会編『明治大正昭和 日蓮門下仏家人名辞典』(国書刊行会、1978 年)、482～483 頁。
- 1 7 『月刊宗報』68 号(1922 年 7 月)による。この時のゝ泉の僧階は大僧都。
- 1 8 『月刊宗報』101 号(1925 年 5 月)による。
- 1 9 『立正大学一覧 自昭和十一年 至昭和十二年』(立正大学、1937 年)、「学部」の「講師」欄に「国文学研究 山上智海」とある。
- 2 0 立正大学史編纂委員会編『立正大学の百四十年』(立正大学学園、2012 年)の「立正大学略年表」による。
- 2 1 『聖戦記念 国民奉公録』(帝国聯合通信社、1942 年)、919 頁参照。
- 2 2 東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター編『東洋大学百年史 通史篇Ⅱ』(東洋大学、1994 年)、45 頁。
- 2 3 「立正大学三十年史」(立正大学宗学研究室編『立正大学創立三十年記念論叢』立正大学宗学研究室、1933 年)の「立正大学教員録／学部(昭和八年十月一日現在)」にゝ泉の名前はない。「予科」「専門部」には「教授 山上智海」の記載がある(23～28 頁)。
- 2 4 『立正大学一覧(昭和 17 年度)』(立正大学史編纂委員会編『立正大学史資料集 第一集』立正大学学園企画広報室、1995 年)を参照。
- 2 5 向上社編集部編『最新上級学校年鑑 昭和 24 年度受験用』(向上社、1948 年)、46 頁。
- 2 6 「寂光」参加歌人録(かぐのみ社編『歌集 寂光』かぐのみ社、1935 年)、11 頁参照。
- 2 7 立正大学専門部部歌、立正学園高等女学校校歌、横須賀市立工業学校校歌、東京都立新制日野中学校校歌などを手掛けたとされる。山上ゝ泉「私の歩める道(その七)」(『かぐのみ』21 巻 7 輯、1949、11 月)参照。
- 2 8 東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター編『東洋大学百年史 通史篇Ⅰ』(東洋大学、1993 年)、865 頁。
- 2 9 かぐのみ社編『歌集 寂光』(かぐのみ社、1935 年)の「跋」を参照。
- 3 0 山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記(新編日本古典文学全集 1)』(小学館、1997 年)、「垂仁天皇」条(210-211 頁)。『古事記』以外にも『日本書紀』や『万葉集』にも記載がある。
- 3 1 かぐのみ社編『歌集 寂光』(かぐのみ社、1935 年)の「跋」を参照。
- 3 2 山上三千生編『歌集 実を結ぶ樹』(かぐのみ社、1957 年)、「あとがき」参照。
- 3 3 復刊が何号まで続いたか不明だが、国立国会図書館デジタルコレクション掲載の最も新しい号は、復刊 12 巻 3 号(1962 年 3 月)となっている。
- 3 4 「その二」(20 巻 6 輯、1948 年 12 月)、「その三」(21 巻 1 輯、1949 年 3 月)、「その四」(21 巻 3 輯、1949 年 5 月)、「その六」(21 巻 6 輯、1949 年 9 月)、「その七」(21 巻 7 輯、1949、11 月)は確認済み。
- 3 5 山上ゝ泉「私の歩める道(その三)」(『かぐのみ』21 巻 1 輯、1949 年 3 月)。
- 3 6 長谷川泉『近代日本文学の展望』(至文堂、1960 年、209 頁)では明治 38 年(1905)のこととし、山上ゝ泉『曼珠』(かぐのみ社、1950 年)に載る「著者略歴 及 主要著書」では、明治 43 年(1910)のこととする。しかし、『中学文壇』にて「新体詩」などの選者としてゝ泉の名が見られるようになるのは、215 号(1907 年 4 月)から。また、237 号(1908 年 3 月)の「交際欄」(62 頁)には、「主筆ゝ泉を初め記者は」とあるので、明治 41 年(1908)時点では主筆だったことが分かる。
- 3 7 古稀祝賀会で贈られた歌は、『曼珠』(かぐのみ社、1950 年)の「自序」にて確認できる。
- 3 8 「水穂子」は、ゝ泉の長男であった山上水穂のことだと考えられる。
- 3 9 室生朝子・本多浩・星野晃一編『室生犀星文学年譜』(明治書院、1982 年)、431 頁。
- 4 0 『かぐのみ』23 巻 1 号「山上ゝ泉先生追悼号」(1952 年 3 月)の見返しに弔辞が載る。
- 4 1 『短歌研究』8 巻 11 号(1939 年 11 月)の「大日本歌人協会員作品集」の最初にゝ泉の作品が載る。
- 4 2 山上智海『日蓮聖人註画讃之研究(附日蓮宗関係錦絵版画総目録)』(日蓮宗宗務院、1943 年)、172～173 頁。
- 4 3 山上ゝ泉「立正大学図書館と錦絵」(『立正大学新聞』1933 年 10 月 6 日)に「今日でこそ宗門の錦絵の類は、私一人の所蔵だけでも正に五百枚に達してみようが」とある。
- 4 4 山上ゝ泉「立正大学図書館と錦絵」(『立正大学新聞』1933 年 10 月 6 日)を参照。
- 4 5 「日本宗教学会第三回大会」(『哲学雑誌』568、1934 年 6 月)、「日蓮宗関係の版画展覧会」(『法華』21 巻 6 号、1934 年 6 月、59 頁)参照。
- 4 6 展示のために貸出した数は、ゝ泉親族所蔵の「御預証」を参照。
- 4 7 『清正公展覧会記念 昭和九年六月』(白木屋、1931 年)には、「清正公錦絵 一、一六 品川区大崎二丁目四四六 山上ゝ泉殿」とある。『かぐのみ』6 年 7 号(1934 年 7 月)の「編集後記」(42 頁)には、「六

- 月は日本橋白木屋の「清正公展覧会」のために同じく版画二百五十点を出陳して好評を博した。いづれも、泉文庫の所蔵に属する」とあるが、「二百五十点」は 250 枚の誤りと推定し、116 点 250 枚とした。
- 48 『法華』23 卷 4 号 (1936 年 4 月)、51 頁参照。
- 49 『法華』23 卷 4 号 (1936 年 4 月)、51 頁参照。
- 50 安中尚史「日蓮宗機関誌『日蓮主義』刊行の経緯とその意義」(『印度学仏教学研究』70 卷 2 号、2022 年 3 月) 参照。
- 51 「日蓮聖人御伝版画」の詳細は、「レファレンス共同データベース」に立正大学古書資料館が提供したレファレンス事例 (管理番号 R-001) を参照。
- 52 斎藤徹雄「二条城の清正 吉田絃二郎の三部作」(『社会人』111、1958 年 7 月)。
- 53 「追悼詠集 (二)」(『かぐのみ』23 卷 1 号、1952 年 3 月) の山上泉吉の歌の詞書に「劇通と云はれた父が其生涯で最後の観劇は、昭和廿六年一月十七日、歌舞伎座での「二条城の清正」だった」とある。
- 54 『都新聞』昭和 9 年 6 月 13 日の広告。
- 55 明治大学図書館所蔵 (毛利家文庫旧蔵)、請求記号「289.1/420//H」。
- 56 泉親族提供の画像による。
- 57 吉川元也「日輪をあらわす長烏帽子形兜について」(『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』29、2003 年 3 月) 参照。
- 58 望月真澄「近世日蓮伝記における旗曼荼羅の記載」(松村壽巖先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教学教団史の諸問題 (松村壽巖先生古稀記念論文集)』山喜房仏書林、2014 年) 参照。
- 59 山上智海『日蓮聖人註画讃之研究 (附日蓮宗関係錦絵版画総目録)』(日蓮宗宗務院、1943 年)、175 頁。ただし、『法華』28 卷 2 号 (1941 年 2 月) の「教界展望」では、辞令の交付を「十二月二十日付」とする。
- 60 「乃ち斯の編纂目録に添へて、泉蒐集架蔵に係る宗門版画・錦絵の全部を挙げて吾が宗門へ提供度贈し、宗門は更に之を立正大学へ移管格護し、以て学徒のためには、宗門芸術の一面としての絵画研究の資料に充て、檀信徒のためには直感的信仰誘導の契とし弄引とすることとしたのである。」(176 頁)。「凡例」2 頁にも似た内容の文章あり。本号の「おわりに」を参照。
- 61 山上、泉「私の歩める道 (その三)」(『かぐのみ』21 卷 1 輯、1949 年 3 月) の中で戦災について触れているが、青少年期に投稿雑誌へ送っていた「作品を取纏めた記念冊子の多く」が焼失したと述べるにとどまる。

※本号における引用文などの旧漢字や異体字の多くは、現行の字体へ改めた。

ゝ泉文庫目録（暫定版）

凡例

- ・この目録には、受贈されたゝ泉文庫の中核をなす錦絵や刷物などを掲載した。なお、近代の複製錦絵、雑誌の付録やその切抜き、近代の冊子本などについては対象外とした。それらの紹介は、機会を改めることとする。
- ・「江戸／明治」「大正／昭和」に大別し、「錦絵」や「刷物」などの項目を設け、「日蓮宗関係地図」を除いて絵師ごとにまとめた。絵師の配列はおおむね雅号の五十音順とした。
- ・同一絵師による資料の配列は、「日蓮宗関係錦絵・版画総目録」（山上智海『日蓮聖人註画讃之研究』日蓮宗宗務院、1943 年）に掲載されているものを優先し、未掲載のものは原則として刊行年順に並べた。ただし、同一シリーズに属する資料については一部例外がある。
- ・複数の絵師が関わる資料については、「日蓮宗関係錦絵・版画総目録」の配列を参考にした。
- ・推定による情報は〔 〕でくくった。極印・改印・版元印に基づく情報でも、転記でなければ〔 〕に入れた。
- ・転記した場合でも、旧漢字や異体字は一部を除き新字体に改めた。
- ・錦絵は判型を、その他は量物を除いて実寸を記載した。
- ・資料名や枚数などの基本情報に加えて、以下の①～⑤の項目を記載した。
 - ①＝絵師落款や著者名に関する情報を転記。印文は〔 〕、図形の説明などは（ ）で示した（③も同様）。
 - ②＝極印・改印、刊行年に関する情報を転記。
 - ③＝版元や蔵版者に関わる情報を転記。版元印など。
 - ④＝資料に押印されている山上ゝ泉の印の種類を記号（A～G）で記載（本号 12 頁参照）。
 - ⑤＝「日蓮宗関係錦絵・版画総目録」に掲載されている場合、その掲載頁数などを記載。たとえば「国貞・4（191 頁）」とある場合は、191 頁の「国貞」の項目の 4 番目に掲載されていることを示す。
 該当情報がない場合は「／」、破れやかすれなどで情報が見えない場合は「欠」を①～⑤に記した。他館のデータベース等で「欠」部分が確認できた場合、「欠」の後に（ ）で補足したことがある。
- ・①～⑤以外に記載すべき情報がある場合は「＊」で示した。
- ・目録の作成に際して参考とした主な文献やデータベースは、目録末尾に記載した。

江戸／明治

◇錦絵

【幾英＝小林幾英（明治期活動）】

しん古武者づくし 大判 1 枚 東屋、[明治期] ①「幾飛亭画」、②「御届明治 年 月 日」、③「(山形に忠)」
「画工出板人兼 フカ川テラマチ 東屋板」、④A、⑤／ ＊「加藤清正」あり

【一昇斎】

東都名所（八景坂） 団扇絵 1 枚 [伊勢屋孫兵衛]、[明治 2 年（1869）]
①「一昇斎筆」、②「極巳」、③「イセ孫」、④／、⑤一昇斎-1（218 頁）

【永興＝小林永興（1868-1932）】

允恭帝衣通姫之許ニ御幸之図 大判 3 枚続 長谷川園吉、明治 28 年（1895）
①「応需／永興／〔法僻〕」、②「明治廿八年二月十二日印刷／全年全月 日発行」、③「日本橋区／小伝馬町三丁メ十七番地／臨写印刷 兼発行人 長谷川園吉」、④A、⑤／

【英泉＝溪斎英泉（1791-1848）】

御利生結ぶの縁日（清正公 白銀台町） 大判 1 枚 [蔦屋重三郎か]、[文化 12 年～天保 13 年（1815～1842）]
①「溪斎／英泉画」、②「極」、③／、④／、⑤英泉-1（193 頁） ＊背景の一部に「つた吉」。

【暁翠＝河鍋暁翠（1868-1935）】

五節句の内 菊月 大判 3 枚続 武川卯之吉、明治 24 年（1891）
①「暁翠」、②「明治廿四年（欠）／全年全月（欠）」、③「日本バシ区本銀丁二丁目十二パンチ／印刷並ニ発行人 武川卯之吉」、④A・C、⑤／

五節句の内 皐月 大判3枚続 武川卯之吉、明治25年(1892)

- ①「暁翠〔河鍋氏〕」、②「明治廿五年四月廿二日印刷／全年全月 日出版」、③「日本バシ区本銀丁二丁目十二パンチ／印刷並ニ発行人 武川卯之吉」、④A、⑤／

【清親＝小林清親(1847-1915)】

平忠度 十六画 大判3枚続 松本平吉、[明治末期か]

- ①「清親〔清親〕」、②／、③「日本橋区吉川町二番地 松本平吉 電話番号浪花六千二百八十六番」、④A、⑤／

【吟光＝安達吟光】

大日本史略図会 六十四(宗祖日蓮上人清澄寺に初て旭に對ひ題目を唱へたまふ) 横中判1枚 [大倉孫兵衛]、明治18年(1885) ①／、②「組合」「証」「御届明治十八年十二月八日」、③欠(編輯画工兼出版人日本橋区通一丁目十九番地 大倉孫兵衛)、④／、⑤芳年・3(200頁) * 泉は作者を芳年に分類している

古今名婦鏡(小宰相) 大判1枚 [佐々木豊吉]、[明治21年(1888)]

- ①「松斎／吟光〔真匠銀光〕」、②欠、③欠、④A、⑤／

五節句之風俗 大判3枚続 福田熊次郎、明治23年(1890)

- ①「松亭吟光〔下手横好〕」、②「明治二十三年 月 日印刷／全 年 月 日出版」、③「印刷兼／発行者 日本橋区長谷川丁十九パンチ／福田熊次郎」、④A、⑤／

【国あき】

新版和漢武者尽 大判1枚 深沢貞次郎、明治22年(1889)

- ①「国あき画」、②「明治廿二年三月十七日印刷 同年三月廿二日出版」、③「(丸にテ)」「沢屋版」「印刷兼発行者 浅草区七軒町二パンチ 深沢貞次郎」、④A、⑤／ * 「加藤清正」あり

【国貞＝歌川豊国3世(1786-1865)】

法華長兵衛 白井権八 大判1枚 相ト、[安政3年(1856)]

- ①「豊国画」、②「改」「辰九」、③「下谷／相ト」、④A、⑤国貞・4(191頁)

江戸の花名勝会 て 三番組(佐藤正清 片岡仁左衛門ほか) 大判1枚 [加藤屋清兵衛]、[文久3年(1863)]

- ①「応需／豊国画」「芳虎画」「広重画」、②「亥二改」、③「加藤清」、④A、⑤国貞・11(192頁)

江戸の花名勝会 ほ 三番組(芭蕉翁桃青 市川寿海老ほか) 大判1枚 [加藤屋清兵衛]、[元治元年(1864)]

- ①「七十八叟／豊国筆」「惺々狂斎」「狂斎写」、②「子二改」、③「加藤清」、④A、⑤国貞・12(192頁)

元旦 妙見詣 大判3枚続 [天保4年(1833)か] * 画中に巳年の絵馬あり

- ①「香蝶楼／国貞画」、②「極」、③「(花菱紋)」、④A、⑤国貞・18(192頁)

流行俳優利生鏡(瀬川路考 芝又ノ帝釈天) 大判1枚 [江崎屋吉兵衛]、[文化12年～天保13年(1815～1842)] ①「五渡亭／国貞画」、②「極」、③「(丸に堅二つ引き) 江崎屋」、④A、⑤国貞・19(192頁)

大尽実ハ日蓮上人 弟子日朝 弟子日像 大判3枚続(存・右中2枚) [大黒屋平吉]、[安政4年(1857)]

- ①「豊国画」、②「改」「巳八」、③「(鉤に本) 両国／大平板」、④A、⑤／

六歌仙容彩 中判1枚(縮緬紙) [川口屋正蔵]、[天保2年(1831)]「六歌仙容彩」初演の年

- ①「香蝶楼／国貞画(年玉印)」、②「極」、③「川正」、④A、⑤／

十二支のうち寅 大判1枚 [和泉屋市兵衛]、[弘化4年～嘉永5年(1847～1852)]

- ①「豊国画」、②「浜」「馬込」、③「江戸／(山形に本) 泉市」、④A、⑤／

政岡 頼兼 大判1枚 [太田屋多吉]、[安政2年(1855)]

- ①「豊国画」、②「改」「卯九」、③「(山形に与) 彫多板」、④A、⑤／

【国貞2世＝歌川豊国4世(1823-1880)】

俤げんじ五十四帖 十九(薄雲) 大判1枚 [蔦屋吉蔵]、[文久4年(1864)]

- ①「梅蝶楼／国貞画(年玉印)」「立斎〔広重〕」、②欠(「子正改)」、③欠(「蔦吉板)」、④A、⑤／

【国周＝豊原国周(1835-1900)】

身延山朝参之図 大判3枚続(存・右中2枚) [越前屋嘉十]、[文久3年(1863)]

- ①「国周画」、②「亥七改」、③「(山形に) 深川／越嘉／高はし」、④A、⑤国周・2(212頁)

俳優落語当りくらべ (主計頭清正 河原崎三升) 大判 1 枚 [具足屋嘉兵衛]、[明治期]

①「豊原国周筆 (年玉印)」、②／、③「人形町一具足屋」、④A、⑤国周・9 (213 頁)

三韓征伐 大判 3 枚続 [近江屋久次郎]、[万延元年 (1860)]

①「一鶯斎／国周画」、②「申八改」、③「近久」、④A、⑤国周・15 (214 頁) *左図に「佐藤正清」あり
鈴ヶ森行烈之図 大判 3 枚続 [山崎屋清七、もしくは清水屋直次郎か]、[文久 3 年 (1863)]

①「一桃園周画」、②「亥四改」、③「(山形に清)」、④A、⑤国周・24 (214 頁) *髭題目の石碑あり
仮名手本忠臣蔵 大序 大判 3 枚続 [藤岡屋慶次郎]、[慶応 2 年 (1866)]

①「国周筆 (年玉印)」、②「寅七改」、③「藤けい」、④A、⑤／

俳優狂言競之内 (鈴かもりの場…) 大判 1 枚 児玉又七、明治 19 年 (1886) *髭題目の石碑あり ①「豊原国周筆 (年玉印)」、②「御届明治十九年 月 日」、③「出版人日本橋通三丁目六バンチ児玉又七」、④／、⑤／

善悪三十六美人 (玉藻前) 大判 1 枚 森本順三郎、明治 9 年 (1876) ①「豊原国周筆 (年玉印)」、②「(中央に「御届」) 明治九年 (欠)」(円形)、③「浅草瓦町二番地／出版人森本順三郎」、④A、⑤／

善悪三拾六美人 (阿英の方) 大判 1 枚 [武川清吉]、明治 9 年 (1876)

①「豊原国周筆 (年玉印)」、②「(中央に「御届」) 明治九年／三月三日」(円形)、③欠、④／、⑤／

善悪三拾六美人 (鍋島の乳母静江) 大判 1 枚 [武川清吉]、明治 9 年 (1876)

①「豊原国周筆 (年玉印)」、②「[明] 治九 [年] (欠)」、③欠、④／、⑤／

善悪三拾六美人 (加賀の千代) 大判 1 枚 [森本順三郎]、明治 9 年 (1876)

①「豊原国周筆 (年玉印)」、②「[明] 治九 [年] (欠)」、③「浅草瓦町二番地 (欠)」、④A、⑤／

善悪三拾六美人 (おさめの方) 大判 1 枚 [武川清吉]、明治 9 年 (1876) ①「豊原国周筆 (年玉印)」、②「(中央に「御届」) 明治九年／三月三日」(円形)、③「板 須田丁四番地 (欠)」、④／、⑤／

現時五十四情 四十七号 (総角) 大判 1 枚 武川清吉、[明治 17 年 (1884)]

①「豊原国周筆」、②「御届明治 年 月 日」、③「本銀丁二丁目十二バンチ 出版人 武川清吉」、④A、⑤／
高貴肖像 ([明治天皇と皇后]) 大判 3 枚続 明治 18 年 (1885)

①「豊原国周筆〔画禅〕」(落款は天地逆)、②「御届明治十八年／十二月廿二日」、③「出版人 長谷川町十九番地 福田熊次郎」、④A、⑤／

[新古歌舞伎十八番] (九代目 猩 市川団十郎) 大判 1 枚 (左半分切取り、36.0×11.8cm) [山村金三郎]、[明治期] ①「豊原国周筆 (年玉印)」、②／、③／、④／、⑤／

【国綱＝歌川国綱 (1805-1868)】

[清正公渡海船中] 大判 3 枚続 相ト、[文久 2 年 (1862)]

①「一蘭斎／国綱画」、②「戊七改」、③「下谷／相ト」、④A、⑤国綱・1 (206 頁)

【国輝＝歌川国輝 (文政～安政活動)】

嬰陀弥女放生会を行ひて善根を施す図 大判 3 枚続 [弘化 4 年～嘉永 5 年 (1847～1852)]

①「一雄斎／国輝画」、②「松村」「福」、③「(井桁にサ)」、④C、⑤／

【国輝＝歌川国輝 2 世 (1830-1874)】

東京両国大川端風景 清正大神社毎月廿四日御縁日参詣群集之図 大判 3 枚続 [近江屋久次郎]、[明治 5 年 (1872)]

①「[応] 需 [曜] 斎国輝」、②「壬申三」、③「近久」、④A、⑤国輝・2 (222 頁)

正清十六勇臣揃之図 大判 3 枚続 [慶応元年 (1865)]

①「一雄斎国輝画 (年玉印)」、②「丑五改」、③「(丸に本)」、④A、⑤国輝・3 (222 頁)

【国利＝歌川国利 (1847-1899)】

山梨県下甲斐国巨摩郡身延山 従七面山一覽之真図 大判 3 枚続 児玉弥七、明治 14 年 (1881)

①「梅寿国利筆〔梅寿〕〔国利〕」、②「明治十四年五月七日御届」、③「浅草馬道町三丁目一番地／画工出板 児玉弥七」、④A、⑤国利・1 (234 頁)

【国政＝歌川国政 4 世 (1848-1920)】

[日蓮上人真実伝之内 甲州石和川鵜飼勘作之霊濟度之図 (中村坐新狂言)] 大判 3 枚続 (存・中 1 枚) [福田熊

二郎]、[明治19年(1886)] ①「梅堂国政筆〔魁〕」、②欠(御届明治十九年九月廿二日)、③欠(…具足や 出版人 福田熊二郎)、④A、⑤国政・10(205頁)

【国芳＝歌川国芳(1797-1861)】

高祖御一代略図(建治三年九月身延山七面神示現) 横大判1枚 [伊勢屋利兵衛]、[天保7年(1836)頃]

①「朝桜楼／国芳画(井桁に橘)」、②「極」、③「(山形に林)」、④A、⑤国芳・1(185頁)

賢女烈婦伝(正岡) 大判1枚 [伊場屋仙三郎]、[天保14年～弘化4年(1843～1847)]

①「朝桜楼／国芳画」、②「吉村」、③「(すはま形 丸に三つ引き)」、④A、⑤／

名高百勇伝(神宮后皇) 大判1枚 [和泉屋市兵衛]、[天保14年～弘化4年(1843～1847)]

①「一勇斎／国芳画(芳桐印)」、②「村松」、③「(富士山形に本) 泉市」、④A、⑤／

見立武者六歌仙 大判3枚続 [大和屋久兵衛]、[天保14年～弘化4年(1843～1847)]

①「一勇斎国芳画」、②欠(「高」)、③「鎌倉川峯／大和屋板」、④／、⑤／

万享応賀戯述の双紙釈迦八相倭文庫之内(悉達太子御歳十五歳にして春宮に立賜ひ並に后妃を嫁り給ふ見立) 大判

3枚続 上州屋重蔵、[弘化4年～嘉永5年(1847～1852)] ①「一勇斎／国芳画(芳桐印)」、②「浜」「衣笠」、

③「江戸／人形町通り／上州屋重蔵／元大坂町代地」、④C、⑤／

武蔵国 調布の玉川 大判1枚 [佐野屋喜兵衛]、[弘化4年～嘉永5年(1847～1852)]

①「一勇斎／国芳画(芳桐印)」、②「浜」「衣笠」、③「佐野喜」、④A、⑤／

【月耕＝尾形月耕(1859-1920)】

[護良親王 淵辺義博に襲わるる図] 大判3枚続 芝定四郎、明治16年(1883)

①「尾形月耕画〔尾形月耕〕」、②「御届 明治十六年 五月 日」、③「京橋区南伝馬町二丁目一番地／出版人 芝定四郎」、④A、⑤月耕・2(227頁)

月耕随筆(廬生夢之図) 大判1枚 武川利三郎、明治20年(1887) ①「月耕〔華暁楼主人〕」、②「明治二十年 月 日印刷出版」、③「発行兼印刷者 芝区神明前 三島町二番地 武川利三郎」、④A、⑤／

月耕随筆(小野小町 雨乞) 大判1枚 武川利三郎、明治25年(1892) ①「月耕〔月耕〕」、②「明治二十五年十一月 日印刷」、③「芝区神明前 三島町二番地 印刷兼 発行者 武川利三郎」、④A、⑤／

源氏五十四帖 十(榊) 大判1枚 横山良八、明治25年(1892)

①／、②「明治廿五年 月 日印刷出版」、③「下谷区スキヤ町十二バンチ印刷兼発行者 横山良八」、④A、⑤／

源氏五十四帖 十四(明石) 大判1枚 横山良八、明治25年(1892) ①「月耕〔月耕〕」、②「明治廿五年 月 日印刷出版」、③「下谷区スキヤ町十二バンチ印刷兼発行者 横山良八」、④A、⑤／

源氏五十四帖 十八(松かせ) 大判1枚 横山良八、明治25年(1892) ①「月耕〔月耕〕」、②「明治廿五年 月 日印刷出版」、③「下谷区スキヤ町十二バンチ 印刷兼発行者 横山良八」、④A、⑤／

源氏五十四帖 廿二(玉葛) 大判1枚 横山良八、明治25年(1892) ①「月耕〔壺中日月長〕」、②「明治廿五年 月 日印刷出版」、③「下谷区スキヤ町十二バンチ 印刷兼発行者 横山良八」、④A、⑤／

源氏五十四帖 廿六(常夏) 大判1枚 横山良八、明治25年(1892) ①「月耕〔月耕〕」、②「明治廿五年 月 日印刷出版」、③「下谷区スキヤ町十二バンチ 印刷兼発行者 横山良八」、④A、⑤／

源氏五十四帖 三十(蘭) 大判1枚 横山良八、明治26年(1893)

①「月耕〔尾形〕」、②「明治廿六年十月廿日印刷全年十一月 日発行」、③「東京市日本橋区馬喰町一丁目四番地 臨写兼発行印刷者横山良八」、④A、⑤／

源氏五十四帖 卅四(若菜上) 大判1枚 横山良八、明治26年(1893) ①「月耕〔月耕〕」、②「明治廿六年 月 日印刷出版」、③「下谷区スキヤ町十二バンチ 印刷兼発行者 横山良八」、④A、⑤／

源氏五十四帖 四十(御法) 大判1枚 横山良八、明治26年(1893)

①「月耕〔尾形月耕〕」、②「明治廿六年十月廿日印刷」、③「全年十一月 日 東京市日本橋区馬喰町一丁目四番地 臨写兼発行印刷者横山良八」、④A、⑤／

源氏五十四帖 四十四(竹川) 大判1枚 横山良八、明治26年(1893)

①「月耕〔尾形月耕〕」、②「明治廿六年十二月 日印刷全年十二月 日発行」、③「東京市日本橋区バクロ丁一丁目四バンチ臨写兼印刷発行者 横山良八」、④A、⑤／

大和物語(馬ふね) 横大判1枚 松本平吉、明治29年(1896) ①「月耕〔月〕〔耕〕」、②「明治廿九年二月一日

印刷全 年全月五日発行」、③「印刷兼発行者 日本橋区吉川町二番地／松本平吉（商標）」、④A、⑤／
 日本花図絵（官女の花見） 大判 1 枚 松本平吉、明治 30 年（1897）＊佐々木豊吉版（明治 26 年）の後刷か
 ①「月耕〔月耕〕」、②「明治三十年二月廿日印刷／全 年全月廿七日発行」、③「印刷兼発行者 東京市日本橋区
 吉川町二番地 電話（浪花）二千二百八十六番 松本平吉」、④A、⑤／
 日本花図絵（いかにせん都の春もおしけれと馴しあつまの花やちるらん 熊野） 1 枚 松本平吉、明治 32 年（1899）
 ＊佐々木豊吉版（明治 25 年）の後刷か ①「月耕〔華暁楼主人〕」、②「明治卅二年五月十日印刷 全年全月十五
 日発行」、③「印刷兼発行者 日本橋区吉川町二番地 松本平吉」、④A、⑤／

【重政＝歌川広重 3 世（1842-1894）】

なぞ合名所百景（柳しま） 中判 1 枚 〔具足屋嘉兵衛〕、〔慶応 2 年（1866）〕
 ①「重政画」、②「寅六改」、③「具足屋」、④A、⑤重政-1（226 頁）

【春暁】

高名武者つくし 大判 1 枚 〔明治期〕
 ①「春暁画」、②／、③／、④A、⑤／ ＊「加藤清正」あり

【勝月＝東洲勝月か】

花くらべ誉錦（さくら 静 堀川夜討） 大判 1 枚 小林鉄次郎、明治 22 年（1889）
 ①「勝月〔尚〕」、②「明治廿二年一月／ 日印刷出版」、③「TOKIO／印刷発行者／日本橋区／通三丁目十二バ
 ンチ／小林鉄次郎」、④C、⑤／

【探景＝井上安治（1864-1889）】

教導立志基 廿一（村上義光） 大判 1 枚 松本平吉、明治 18 年（1885） ①「井上／探景画〔探景〕」、②「御届
 明治十八年 十二月廿五日」、③「画家／出版 両国吉川町二番地／松本平吉版」、④C、⑤／

【周延＝楊洲周延（1838-1912）】

日蓮大士御真実伝 第一巻（固瀬竜の口御法難の図） 大判 3 枚続（存・右 1 枚） 〔江川八左衛門板〕、〔明治 22 年
 （1889）〕 ①「楊洲周延筆（年玉印）」、②欠、③「…滋栄堂主人謹誌」、④A、⑤周延-2（216 頁）

小牧役 加藤清正 本多忠勝 大判 3 枚続 長谷川常二郎、明治 30 年（1897）
 ①「楊洲／周延（年玉の中に楊か）」、②「明治卅年十二月二十日印刷…」、③「印刷兼発行者／神田区カヅ丁五バ
 ンチ／長谷川常二郎」、④A、⑤周延-6（216 頁）

見立十二支（丸に寅）神楽坂 毘沙門 大判 1 枚 森本順三郎、明治 26 年（1893）
 ①「楊洲周延筆〔■（不詳）絵〕」「延保画」、②「明治廿六年／八月廿二日印刷／八月廿五日発行」、③「臨写／
 印刷兼発行者／浅草区瓦丁二バンチ／森本順三郎」、④A、⑤周延-11（216 頁） ＊「竹陽斎蔵」の印記あり

太閤記山崎合戦ノ図 大判 3 枚続 綱島亀吉、明治 26 年（1893）
 ①「楊洲周延筆（年玉印）」、②「明治廿六年 月 日印刷／同 年 月 日発行」、③「印刷兼発行者／日本橋区
 馬喰町／二丁目十四番地／綱島亀吉」、④A、⑤周延-13（216 頁）

加藤清正虎狩之図 大判 3 枚続 綱島亀吉、明治 20 年（1887）
 ①「楊洲周延筆（年玉印）」、②「御届明治二十年一月 日」、③「日本橋区馬喰町二丁目十四番地／出版人 綱島
 亀吉」、④A、⑤周延-14（216 頁）

雪月花（三州 岡崎月 牛若丸 浄瑠璃姫） 大判 1 枚 小林鉄次郎、〔明治 17 年（1884）〕 ①「楊洲周延筆」、②「御
 届明治 年 月 日」「組合」「証」、③「日本橋道三丁目十三番地／出版人小林鉄次郎」、④A、⑤／

雪月花（江戸 廓の月 高尾） 大判 1 枚 小林鉄次郎、明治 19 年（1886）
 ①「楊洲周延筆」、②「御届明治十九年 月 日」、③「日本橋三丁目十三番地／出版人小林鉄次郎」、④A、⑤／
 名誉色咲分 三十（稲本楼 歌之助 仲の丁 みつ） 大判 1 枚 小林鉄次郎、明治 17 年（1884） ①「楊洲周延筆（年
 玉印）」、②「御届明治十七年九月二日」、③「日本橋通三丁目十二番地／出版人 小林鉄次郎」、④／、⑤／

源平盛衰記 十（那須与一 玉虫前） 大判 1 枚 綱島〔亀吉〕、明治 18 年（1885） ①「楊洲周延筆〔周延〕」、②
 「御届明治十八年七月二日」、③「出版人 馬喰町二丁目十番地 綱島（破れ）」、④A、⑤／

源平盛衰記（文覚上人） 大判 1 枚 〔綱島亀吉〕、〔明治 18 年（1885）〕

①「楊洲周延筆」、②／、③／、④A、⑤／

東絵昼夜競 (大磯の虎は大磯駅の遊君なりしが曾我十郎祐成に…) 大判1枚 小林鉄次郎、明治19年(1886)

①「楊洲周延筆(年玉印)」、②「御届明／治十九年／一月九日」、③「日本橋区通三丁目十三番地／出版人 小林鉄次郎」、④A、⑤／

牛若丸浄瑠璃姫之館忍図 大判3枚続 福田熊二郎、明治20年(1887) *菅谷与吉版(明治19年)の後刷か

①「楊洲周延筆(年玉印)」、②「御届／明治二十年／九月十二日」(円形)、③「日本はし区／長谷川町／十九番地／画工兼／出版人 福田熊二郎」、④A、⑤／

秋色浅妻船 大判3枚続 福田熊次郎、[明治23年(1890)] ①「楊洲／周延(年玉に楊か)」、②「明治 月三日／印刷／全年八月一日／出版」、③「印刷兼発行者／日本橋区長谷川丁／十九パンチ／福田熊次郎」、④A、⑤／

志賀寺上人京極の御息所ヲ見る 大判3枚続 松本平吉、明治25年(1892)

①「楊洲周延筆〔楊洲〕」、②「明治二十五年十二月 日印刷出版」、③「日本橋区吉川町二番地 画作印刷兼発行者 松本平吉」、④A、⑤／

豊太閤観桜之図 大判3枚続 坂口忠治郎、明治29年(1896) ①「楊洲周延」、②「明治廿九年 月 日印刷／全年全月発行」、③「下谷区池之端仲町十八番地／印刷兼発行者／坂口忠治郎」、④B、⑤／

【竹斎＝小山竹斎】

加藤清正 朝鮮之役に猛虎討取之図 大判3枚続 深沢貞次郎、明治18年(1885)

①「応需／小山竹斎〔竹斎〕」、②「組合」「証」「御届(丸にテ)／明治十八年二月／十七日」、③「下谷竹丁十二番チ／出版人 深沢貞次郎」、④A、⑤竹斎-1(221頁) *ト泉は「竹家」とする

【年英＝右田年英(1863-1925)】

[源義家] (ふく風をなこそその関とおもへとも 道も背にちる山さくらかな 義家) 大判3枚続 佐々木豊吉、明治23年(1890) ①「応需 年英筆〔季英〕」、②「明治廿三季 月 日印刷／同年 月 日出版」、③「京橋区尾張町二丁目一番地／印刷兼 発行者 佐々木豊吉」、④A、⑤／

【豊宣＝歌川豊宣(1859-1886)】

関白秀吉公 於御前三十六番角觥之図 大判3枚続 森本順三郎、明治17年(1884) ①「香蝶楼豊宣(年玉印)」、②「御届明治十七年三月 日」、③「浅草瓦町二番地／出版人 森本順三郎」、④A、⑤豊宣-4(219頁)

新撰太閤記(其勢如龍 其猛如虎) 大判2枚続 武川清吉、明治16年(1883) ①「豊宣画(年玉印)」、②「極」「御届 明治十六年／月 日」、③「本銀町二丁目十二ハンチ／出版人 武川清吉」、④A、⑤豊宣-5(219頁)

新撰太閤記(猛威海外に震ふ) 大判2枚続 小林鉄次郎、明治16年(1883)

①「豊／宣／画」、②「極」「御届 明治十六年／十月六 日」、③「出版兼画工 日本橋区通三丁目十三番地 小林鉄次郎」、④A、⑤豊宣-8(219頁)

新撰太閤記(剛将の下に弱兵なし) 大判2枚続 森本順三郎、明治16年(1883) ①「豊宣画」、②「組合」「証」「明治十六年十月 日 御届」、③「浅草区瓦町二番地／画工版元兼森本順三郎」、④A、⑤豊宣-9(219頁)

【延一＝楊斎延一(1872-1944)】

加藤清正 新納武蔵守 千代川大勇戦之図 大判3枚続 松永作次郎、明治25年(1892)

①「応需／楊斎／延一筆〔楊斎か〕」、②「明治廿五／年九月 日／印刷同月 日」、③「出版／印刷兼発行者／日本橋区室町三丁目十番地／松永／作次郎」、④A、⑤延一-2(217頁)

高位婚礼式之図 大判3枚続 長谷川常次郎、明治33年(1900) ①「応需／楊斎」、②「明治卅三年二月 日印刷／全 年二月 日発行」、③「印刷兼／発行 東京市神田区／銀座町五番地／長谷川常次郎」、④／、⑤／

【梅素薫＝関根竹二郎】

[東京じまんめいぶつ会] (「見立模様牛込毘沙門織」部分切り取) 大判1枚(左下切り、20.3×11.2cm) 福田熊次郎、明治29年(1896) ①「梅素薫案〔せきね〕」、②「明治廿九年十一月 日印刷全年十一月 日発行」、

③「印刷兼発行者東京都日本橋区長谷川町十九番地 福田熊次郎」、④A、⑤梅素薫-1(224頁)

【広貞＝五粽亭広貞(江戸末期活動)】

日蓮上人一代記 中判2枚続 [嘉永2年(1849)] *大坂竹田での『日蓮上人御法海』の上演年

①「広貞」、②／、③／、④A、⑤広貞・5 (196 頁)

【広重＝歌川広重 (1797-1858)】

東都名所 (柳島妙見堂) 横大判 1 枚 [佐野屋喜兵衛]、[天保後期]

①「広重画」、②／、③「佐野喜」、④A、⑤広重・18 (188 頁)

[鬼の題目] 小判 1 枚 (墨摺) [和泉屋市兵衛]、[文化 12 年～天保 13 年 (1815～1842)]

①「広重筆」、②「極」、③「泉市」、④／、⑤広重・24 (189 頁)

【広重＝歌川広重 2 世 (1826-1869)】

三十六花撰 (東都堀の内山茶花) 大判 1 枚 [蔦屋吉蔵]、[慶応 2 年 (1866)]

①「喜斎／立祥 [日本画]」、②「寅七改」、③「蔦吉板」、④A、⑤広重 2・2 (194 頁)

江戸名勝図会 (堀之内妙法寺) 大判 1 枚 (縮緬紙) [藤岡屋慶次郎]、[文久 2 年 (1862)]

①「広重画」、②欠 (「戌十一改」)、③欠 (「藤けい」)、④A、⑤広重 2・8 (194 頁)

江戸名勝図会 (柳島妙見) 大判 1 枚 [藤岡屋慶次郎]、[文久 2 年 (1862)]

①「広重画」、②欠 (「戌十一改」)、③欠 (「藤けい」)、④A、⑤広重 2・13 (195 頁)

江戸自慢三十六興 (池上本門寺会式) 大判 1 枚 [平野屋新蔵]、[元治元年 (1864)]

①「広重画」、「喜翁豊国筆」(3 世豊国)、②「子二改」、③「万丁 平のや」、④A、⑤広重 2・9 (195 頁)

江戸自慢三十六興 (堀の内淀はし水飴) 大判 1 枚 [平野屋新蔵]、[元治元年 (1864)]

①「広重画」、「喜翁豊国筆」(3 世豊国)、②「子二改」、③「万丁 平のや」、④A、⑤広重 2・10 (195 頁)

【芳幾＝歌川芳幾 (1833-1904)】

太平記之内 (藤原正清古今猛勇者にして…) 大判 3 枚続 [辻岡屋文助]、[万延元年 (1860)] ①「一恵斎芳幾

画 (芳桐印)」、②「申二改」、③「(富士山形に文) 横山町／辻岡屋／三丁目」、④A、⑤芳幾・1 (208 頁)

【芳員＝歌川芳員 (江戸末期～明治初期活動)】

[清正公大神儀] 大判縦 2 枚続 [江戸末期]

①「一寿斎／芳員画」、②／、③／、④A、⑤芳員・1 (199 頁)

武勇組討尽 (四王連但馬守政高 佐藤虎之助清正) 大判 1 枚 [丸屋甚八]、[文久 2 年 (1862)]

①「一川芳員画」、②「戌正改」、③「(丸に) 甚」、④A、⑤芳員・2 (199 頁)

太田春長公之受命 真柴久吉出陣之図 大判 3 枚続 [綱島亀吉]、[慶応元年 (1865)]

①「一川芳員画」、②「丑五改」、③「御蔵前天王町／辻岡屋亀吉板」、④A、⑤芳員・5 (199 頁)

本朝名将鏡 (藤原正清朝臣) 大判 1 枚 [丸屋甚八]、[安政 5 年 (1858)]

①「一寿斎／芳員画 (芳桐印)」、②「午五」、③「(丸に甚)」、④A、⑤芳員・6 (199 頁)

東都名所 (柳島妙見堂) 大判横 1 枚 [和泉屋市兵衛]、[嘉永 6 年 (1853)]

①「一寿斎／芳員画」、②「村松」「福」「丑六」、③「本泉市」、④A、⑤芳員・7 (199 頁)

【芳艶＝歌川芳艶 (1822-1866)】

[和藤内虎退治の図] 大判 3 枚続 [海老屋林之助]、[弘化 4～嘉永 5 年 (1847～1852)]

①「一栄斎／芳艶画」、②「村松」「吉村」、③「(井桁にト)」、④A、⑤／

【芳年＝月岡 (大蘇) 芳年 (1839-1892)】

身延山七面大明神出現 大判 3 枚続 [綱島亀吉]、[明治元年 (1868)]

①「一魁斎／芳年筆」、②「辰八改」、③「辻亀板」、④A、⑤芳年・4 (200 頁)

新柳二十四時 午前七時 大判 1 枚 中村美津、明治 13 年 (1880) ①「応需芳年画 [善悪]」、②「御届 明次 (マ

マ) 十三年／十一月廿四日」、③「小伝馬町三丁目十二バンチ／出版人中村美津」、④／、⑤芳年・5 (200 頁)

日蓮上人石和河にて鵜飼の迷魂を済度したまふ図 大判 3 枚続 秋山武右エ門、[明治 18 年 (1885) か]

①「芳年 [大蘇]」、②／、③「…室町三丁目九バンチ／出版人 秋山武右エ門」、④A、⑤芳年・9 (201 頁)

「豊臣昇進録」([清須会議]) 大判 3 枚 [万屋孫兵衛]、[明治期]

①「一魁斎／芳年筆」、②／、③「版 (出山形に万) 元／日本はし／万孫／通り一」、④A、⑤芳年・13 (201 頁)

賤ヶ峰大合戦之図 大判 2 枚続 [山口屋藤兵衛]、[慶応 2 年 (1866)]

①「一魁斎／芳年筆」、②「寅十二改」、③「ト 山口」、④A、⑤芳年-19 (201 頁)

朝鮮征伐大評定ノ図 大判 3 枚続 前田正三郎、明治 10 年 (1877) ①「応需／芳年筆画〔大蘇〕」、②「明治十／内務卿 御届」、③「出版兼編輯／平野町四丁目／前田正三郎」、④A、⑤芳年-21 (201 頁)

本朝智仁英勇鑑 (村上彦四郎義光) 大判 1 枚 福田熊治郎、明治 11 年 (1878)

①「大蘇芳年〔大蘇〕」、②「明治十一年一月廿三日御届」、③「長谷川町廿番地／出版人 福田熊治郎」、④A、⑤／大日本史略図会 (第十二代 景行天皇、日本武尊) 大判 3 枚続 山中喜太郎、明治 13 年 (1880) ①「大蘇芳年〔大蘇〕」、②「明治十三年五月 日御届」、③「出版人 銀座四丁目三番地 山中喜太郎」、④A・C、⑤／皇国二十四功 (伊達家の乳母 浅岡) 大判 1 枚 津田源七、明治 14 年 (1881)

①「大蘇／芳年画」、②「御届明治十四年九月 日」、③「出版人 尾張町二丁目壱番地 津田源七」、④A、⑤／皇国二十四功 (楠帶刀正行) 大判 1 枚 松本平吉、明治 26 年 (1893) ①「芳年〔芳年〕」、②「明治廿六年三月 日印刷出版」、③「日本橋区吉川町二番地 画作印刷兼発行者 松本平吉」、④A、⑤／

皇国二十四功 (名和小太郎左衛門長重) 大判 1 枚 松本平吉、明治 28 年 (1895) ①「芳年〔芳年〕」、②「明治廿八年 月 日印刷全年月 日発行」、③「東京日本橋区吉川町二番地 印刷兼発行者 松本平吉」、④A、⑤／月百姿 (室遊女 いつくしまの月) 大判 1 枚 秋山武右エ門、明治 19 年 (1886) ①「芳年〔大蘇〕」、②「組合」

「証」「御届明治十九年二月 日」、③「日本バシ室町三丁目九バンチ／版元 秋山武右エ門」、④A、⑤／月百姿 (源氏 夕顔巻) 大判 1 枚 秋山武右エ門、明治 19 年 (1886) ①「芳年〔大蘇〕」、②「組合」「証」「御届明治十九年三月 日」、③「日本バシ室町三丁目九バンチ／版元 秋山武右エ門」、④A、⑤／

月百姿 (稲むらか崎の明ほの月) 大判 1 枚 秋山武右エ門、明治 19 年 (1886)

①「芳年〔大蘇〕」、②「組合」「証」「明治十九年九月 日」、③「日本バシ区室町三丁目九バンチ／出版人 秋山武右エ門〔こつけい堂〕」、④A、⑤／

月百姿 (児島高德 雨中月) 大判 1 枚 [秋山武右衛門]、明治 22 年 (1889)

①「芳年〔芳〕〔年〕」、②「明治廿二年 月 日印刷」、③「日本バシ区室町三丁目九バンチ (欠)」、④A、⑤／つきの百姿 (蟬丸 月の四の緒) 大判 1 枚 [秋山武右衛門]、明治 24 年 (1891)

①「芳年〔芳年〕」、②「明治廿四年八月 日印刷」、③「日本橋区室町三丁目九番地 (欠)」、④A、⑤／

つき百姿 ([赤染衛門]) 大判 1 枚 [秋山武右衛門]、明治期 ①「芳年〔大蘇〕」、②「組合」「証」「御届明治 年 月六日」、③「日本バシ区室町三丁目九バンチ (欠)」、④A、⑤／

新撰東錦絵 (太田道灌初テ歌道ニ志ス図) 大判 2 枚続 綱島亀吉、明治 20 年 (1887) ①「芳年〔大／蘇〕」、②「御届明治二十年／ 年 月」、③「日本橋区馬喰町二丁目十四バンチ／出版人 綱島亀吉」、④A、⑤／

新形三十六怪撰 (内裏に猪早太鶴を刺し図) 大判 1 枚 佐々木豊吉、明治 23 年 (1890)

①「芳年〔芳〕〔年〕」、②「明治廿三年 日印刷／同年月 日出板」、③「京橋区尾張町 二丁目一番地 印刷兼発行者 佐々木豊吉」、④A、⑤／

【芳豊＝歌川芳豊 (1830-1866)】

道戯手遊合戦 大判 3 枚続 [辻岡屋文助]、[文久 2 年 (1862)]

①「一龍斎／芳豊画」、②「戌十二改」、③「辻文」、④A、⑤芳豊-1 (209 頁)

【芳虎＝歌川芳虎 (1828 頃-1887 頃)】

清正公大神儀 加藤主計頭兼肥後守従一位藤原朝臣清正公之像 大判縦 2 枚続 藤岡屋慶治郎、[江戸末期]

①「一孟斎／芳虎謹画」、②／、③「通田町／藤岡屋慶治郎板」、④A、⑤芳虎-4 (197 頁)

三韓征伐之図 大判 6 枚続 伊勢兼、文久 3 年 (1863)

①「芳虎画」、②「亥八改」、③「(鉤に吉) 伊勢兼」、④A、⑤芳虎-5 (197 頁)

本朝名将鏡 (大江因幡守広元) 大判 1 枚 伊勢兼、[安政 5 年 (1858)]

①「一寿斎／芳員画 (芳桐印)」、②「午五」、③「(鉤に吉) 伊勢兼」、④A、⑤／

【芳盛＝歌川芳盛 (1830-1885)】

日蓮上人波題目之図 大判 3 枚続 相ト、[安政 4 年 (1857)]

①「一光斎／芳盛画」、②「巳七」「改」、③「下谷／相ト」、④A、⑤芳盛-1 (207 頁)

仮名手本忠臣蔵 (六段目) 横大判 1 枚 広岡屋幸助、[文久 2 年 (1862)]

- ①「一恵斎芳幾画」、②「戌六改」、③「板元／広岡屋幸助」、④A、⑤／
 仮名手本忠臣蔵（十段目） 横大判 1 枚 広岡屋幸助、[文久 2 年（1862）]
 ①「一恵斎芳幾画」、②「戌六改」、③「板元／広岡屋幸助」、④A、⑤／

【未詳】

清正公大神儀 大判 1 枚 [江戸期]

- ①「柳」、②／、③／、④A、⑤未詳-13（236 頁）
 [子供遊端午のにぎわい] 大判 2 枚続（存・右 1 枚） [慶応 4 年（1868）頃]
 ①／、②／、③／、④A、⑤／

◇刷物

〈絵入り資料〉

【玉泉斎＝藤好信行】

高祖御一代略図 1 枚（42.5×59.8cm、墨刷） 寛政 8 年（1796）

- ①「玉泉斎法眼瑠山藤好信筆〔好信〕」、②「寛政八丙辰歳仲春穀旦」、③／、④A、⑤／

【国麿＝歌川国麿 2 世（明治 10 年（1877）頃活動）】

新版画合源氏双六 畳物 1 鋪（多色刷） 明治 18 年（1885）

- ①「菊哉国麿」、②「明治十八年 月 日御届」、③／、④A、⑤／

【洞旭＝菅原洞旭】

[大菩薩御一代御利益御難之図] 2 枚（存・前半 1 枚、32.3×46.9cm、墨刷） [江戸後期]

- ①「画工 玉梅斎洞旭〔菅原〕」、②／、③／、④A、⑤洞旭-1（225 頁）

【芳虎＝歌川芳虎（1828 頃-1887 頃）】

三十六歌仙双録 畳物 1 鋪（多色刷） [和泉屋市兵衛]、[安政 4 年（1857）]

- ①「一猛斎芳虎画」、②「改」「巳八」、③「版元 芝神明前 和泉屋市兵衛」、④B・C、⑤／

【未詳】

[日蓮聖人御説法の図] 1 枚（37.2×22.7cm、墨刷、元軸装） [玉沢妙法華寺]、[江戸中期か] ①／、②／、
 ③／、④A、⑤未詳-12（236 頁） * 玉沢妙法華寺蔵「絹本著色日蓮上人像」を模した刷物。「玉沢日〔超か〕
 （花押）」（妙法華寺 30 世（1758 年没）か）の墨書きあり。購入時の書店目録を切貼（日詔の花押とする）。>
 泉のメモ書きに「昭和十八年一月十日購求／小田原市十字町 南天王より」（赤ペン）とあり。

御真骨天蓋図（身延） 1 枚（40.6×31.0cm、多色刷、元軸装） [身延山久遠寺]、[明治前期頃か]

- ①／、②／、③／、④B、⑤未詳-20（237 頁）

[日蓮聖人御入滅の図] 1 枚（42.6×54.2cm、墨刷） [江戸後期]

- ①／、②／、③／、④A、⑤未詳-42（239 頁）

日蓮聖人御一生記 1 枚（36.8×51.8cm、淡彩） [江戸後期]

- ①／、②／、③／、④A、⑤未詳-44（239 頁）

[巢鴨靈感院諸尊図] 1 枚（60.7×28.8cm、墨刷、元軸装） 巢鴨靈感院、弘化 3 年（1846）

- ①／、②・③「諸尊彫刻再建建立入仏供養之御題目一千部 弘化三丙午年四月八日 巢鴨靈感院」「稻荷山／日
 相（花押）／二十三世」、④A、⑤未詳-58（240 頁）

[日蓮大菩薩座像図]（南無日蓮大菩薩） 1 枚（67.0×22.6cm、墨刷） [身延山久遠寺]、[明治大正期]

- ①／、②／、③「身延／日慈（花押）／七十九世」（朱刷）、④／、⑤／ * 日慈が身延山久遠寺 79 世となった
 のは明治 42 年（1909）9 月。

[日蓮鵜飼の魂を回向する図] 1 枚（50.5×21.2cm、墨刷、元軸装） [鵜飼山遠妙寺]、[江戸中期] ①／、②
 ／、③／、④B、⑤／ * 「鵜飼山／日英（花押）／三十六世」の墨書あり。堯翁院日英は享和 2 年（1802）没

教訓双六 畳物 1 鋪（石版多色刷） 勝山栄三郎、明治 26 年（1893）

- ①／、②「明治廿六年十二月二十一日印刷／明治廿六年十二月二十四日発行」、③「東京市京橋区南鍋町式丁目

壺番地／印刷兼 発行人 勝山栄三郎」、④A、⑤／ ＊「加藤清正」のマスあり
和漢小説万巻寿語録 豊物 1 鋪 (多色刷) 鎌田実明 (深松堂蔵)、明治 34 年 (1901)
①／、②「明治三十四年十月一日印刷 同月■ (墨格) 日発行」、③「深松堂蔵」「印刷兼発行者 本所横綱町二丁目十八番地 鎌田実明」、④C、⑤／

【日蓮宗関係地図】

身延山絵図 豊物 1 鋪 (彩色) 波木井織部、[江戸中期]

①／、②／、③「身延鏡 并絵図 外より一切出し不申候」「身延中町／波木井織部」、④A、⑤地図-3 (245 頁)
身延山一覽表独案内 1 枚 (36.5×49.2cm、銅版、墨刷) 松本米兵衛、明治 14 年 (1881) ①「画工出版人…松本米兵衛」、②「明治十四年四月廿三日御届」「身延山久遠寺検査済」、③「画工出版人 山梨県下甲斐国西山梨郡甲府日町九番地 松本米兵衛／東京浅草馬道町三丁目／壺番地児玉弥七方止宿」、④A、⑤地図-7 (245 頁)

改正身延山絵図 1 枚 (37.2×50.7cm、墨刷) 川口駒蔵、明治 21 年 (1888)

①／、②「明治廿一年十月十五日印刷／同年十二月四日出版」、③「明治廿一年十月十五日印刷／同年十二月四日出版 山梨県南巨摩郡身延村二百十六番地／版權所有発行者 川口駒蔵板」(朱)、④A、⑤地図-10 (245 頁)
池上長栄山本門寺略図 1 枚 (38.3×58.2cm、墨刷) 池上大坊、文政 7 年 (1824)

①「尚英画」、②・③「文政七申年 池上大坊蔵板」、④A、⑤地図-12 (245 頁) ＊寄進者、能勢嘉門

小湊山絵図 1 枚 (33.3×46.6cm、墨刷) [江戸後期]

①／、②／、③／、④A、⑤地図-16 (246 頁)

相州鎌倉松葉谷根本御小庵安国寺之図 1 枚 (35.5×49.3cm、多色刷) 安国寺、嘉永 5 年 (1852)

①「真川意一画」、②「時惟嘉永五壬子七月発兌」、③「安国寺蔵」、④A、⑤地図-20 (246 頁)

[蘇鉄の図] (撰泉堺広普山妙国寺) 1 枚 (32.9×47.8cm、墨刷) [妙国寺]、[江戸後期]

①「浪花／今来新之丞春延／写之図」、②／、③／、④B、⑤地図-22 (246 頁) ＊ゝ泉は地図に分類している

[小湊誕生寺絵図] 豊物 1 鋪 (下三分の一程度のみ存) [江戸期]

①／、②／、③／、④A、⑤／

〈文字資料〉

[触書瓦版] (申渡 青物町 多兵衛店 半七 [妻] りよ) 1 枚 (23.0×31.2cm) [文政 3 年 (1820)]

①／、②／、③「辰正月十八日」、④A、⑤／ ＊文中に「堀の内村妙法寺」。ゝ泉による内容の考察メモあり (昭和 20 年 6 月 24 日)

開運御題目石略縁起 1 枚 (31.2×40.9cm) 常高山延寿寺、万延元年 (1860) ＊寛政 3 年 (1791) 版の改版

①／、②／、③「時寛政第三龍辛亥九月望日／越之後州直江津今町／常高山延寿寺十八世 日秀／万延元庚申年七月改板 同 廿五世 日照 (花押)」、④／、⑤／

高名功名手柄覧 1 枚 (44.2×32.9cm) [江戸後期]

①「覚龍斎／播山述」、②／、③／、④A、⑤／

◇肉筆画

[聖徳太子孝養像] 1 枚 (59.5×23.6cm、元軸装) [江戸期] ①／、②／、③／、④／、⑤／

＊画賛「龍道人題／丙辰之夏／予現国王身／王身可得度／斑宮憲法新／衡岳法華者」。

＊裏に「大正二年五月 奉物 山上権僧都父／佐々木直古人／大田 日蓮宗布教所什」と墨書。

[加藤清正座像] 1 枚 (39.6×22.7cm、元軸装か) [江戸期か] ①／、②／、③／、④／、⑤／

＊「南無妙法蓮華經」の小さな文字を連ねて描かれた文字絵。

大正／昭和

◇版画

【運一＝平塚運一 (1895-1997)】

[日蓮聖人] 1 枚 (87.5×58.8cm、墨刷) 平塚運一、昭和 12 年 (1937) ①「運一 [平塚運一]」(直筆署名か)、

②「昭和十二年五月二日雕刻了 平塚運一」、③／、④B、⑤運一-1 (234 頁) *「万體摺写之内 (四百二十三)」
(括弧内は墨書)

【江逸＝石渡江逸 (1897-?)】

池上本門寺 (仁王門) 1 枚 (38.5×26.0cm、多色刷) 渡辺庄三郎、昭和 7 年 (1932)

①「江逸 [いしわた]」、②「昭和七年六月作」、③「版權所有 渡辺庄三郎」、④A、⑤江逸-1 (222 頁)

【光徳＝渡辺光徳 (1887-1945)】

[千束の池] 1 枚 (20.2×28.3cm、銅版) [渡辺光徳]、[昭和初期か] ①「光徳」、「K.watanabe.」(鉛筆書き)、
②／、③／、④A、⑤／ *右端に「千束の池 (エッチング) 渡辺光徳作」とあり。光徳は、ㄟ 泉の著作『日本文学と法華経』の装幀を手掛けた (同書「凡例」)。

【巴水＝川瀬巴水 (1883-1957)】

身延山久遠寺 [祖師堂] 1 枚 (38.8×25.8cm、多色刷) 渡辺版画店、昭和 5 年 (1930)

①「巴水 (印章)」、②「昭和五年九月作」、③「版元渡辺版画店」、④A、⑤巴水-1 (232 頁)

◇刷物

〈絵入り資料〉

【清忠＝鳥居清忠 4 世 (1875-1941)】

大坂城 ([沓手鳥孤城落月 辻番付]) 1 枚 (48.5×34.6cm、墨刷) 歌舞伎座、大正 5 年 (1916)

①「清忠筆」、②「大正五年菊月興行」、③「歌舞伎座」、④A、⑤／

【国松＝歌川国松 (1855-1944)】

[高祖御一代図会納札] 17 枚 (存 16 枚、15.3×20.1cm、多色刷) 和泉橋倶楽部、大正 12 年 (1923)

①「国松 (年玉印)」ほか、②「大正十二年三月廿一日夜」、③「和泉橋倶楽部 今主／矢部古泉」、④A、⑤国松-1 (229 頁) *「二、御剃髪」1 枚を欠く

主な参考文献

- ・「改印」「浮世絵版画の版元」「版元印一覧」(菊地貞夫 [他] 著、原色浮世絵大百科事典編集委員会編『原色浮世絵大百科事典 3 巻 様式・彫摺・版元』大修館書店、1982 年)
- ・国際浮世絵学会編『浮世絵大事典』(東京堂出版、2008 年)
- ・池上本門寺編『日蓮宗寺院大鑑』(池上本門寺、1981 年)
- ・ARC 浮世絵・日本絵画ポータルデータベース <https://www.dh-jac.net/db/nishikie/search_portal.php>
- ・浮世絵検索データベース <<https://ja.ukiyo-e.org/>>
- ・早稲田大学文化資源データベース <<https://archive.waseda.jp/archive/index.html>>



表紙資料紹介

建治三年九月身延山七面神示現 (高祖御一代略図の内) 横大判 1 枚 (25.6×38.0cm)

朝桜楼国芳画(歌川国芳)画 [江戸]、[伊勢屋利兵衛]、[天保 7 年 (1836) 頃] 刊

日蓮の有名な逸話を描いた錦絵「高祖御一代略図」(10 枚揃) の内の 1 枚。建治 3 年 (1277) 9 月、日蓮の説法を聞きに来ていた身延山の七面天女が龍の姿を現した場面を描く。絵師の歌川国芳 (1797-1861) は日蓮宗の信徒であったことが知られる。

「高祖御一代略図」は人気があり、大正時代などに複製版が刊行されていた。ㄟ 泉文庫にも複製版が数枚あるものの、江戸時代のものは本資料以外に見られない。



立正大学古書資料館通信

第 15 号 開館 10 周年記念特別号

令和 7 年 3 月 31 日発行

編集・発行 立正大学図書館 品川学術情報課
〒141-8602 東京都品川区大崎 4-2-16

TEL : 03-3492-6615

HP : <https://www.ris.ac.jp/library/>